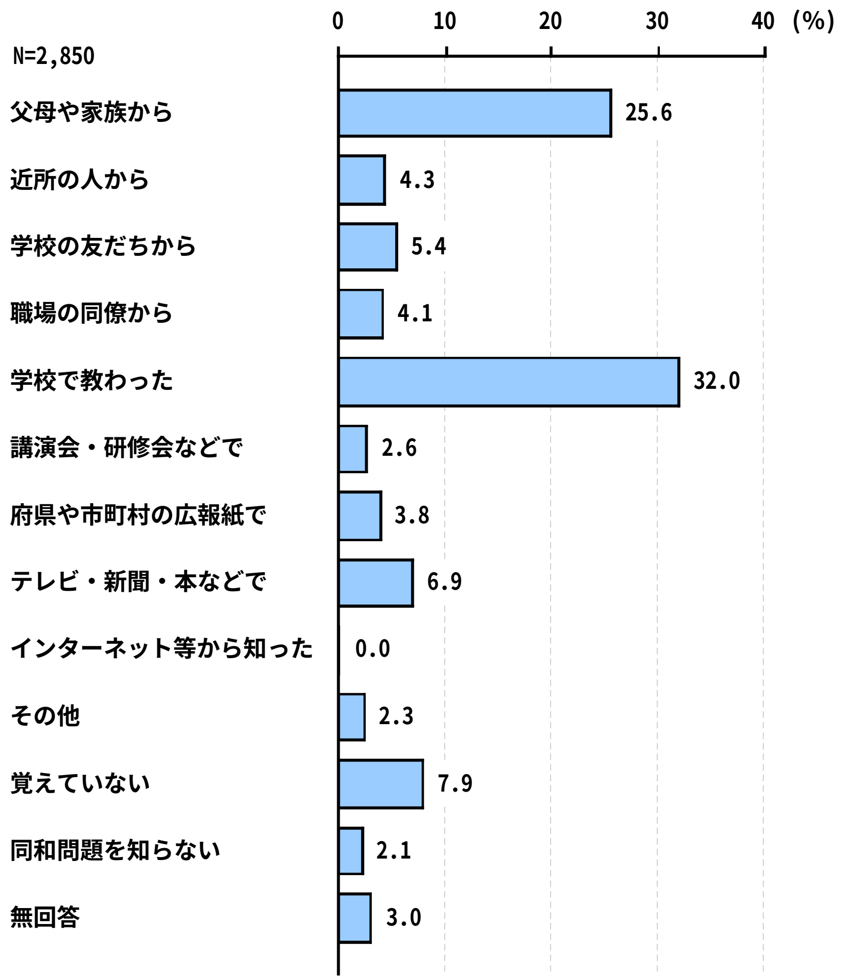
2 同和問題について

問３　あなたが同和問題や被差別部落（同和地区）があることをはじめて知ったのは、どのようにしてですか。（あてはまるもの１つだけに○）

【問３　同和問題や被差別部落を知った経緯】



同和問題や被差別部落を知った経緯については、「学校で教わった」（32.0%）と「父母や家族から」（25.6%）が、多数の項目の中で突出して高い割合となっている。

【問３　同和問題や被差別部落を知った経緯（年代別）】

（上段：回答者数／下段：回答比率）（%）

	全体	父母や家族から	近所の人から	学校の友だちから	職場の同僚から	学校で教わった	講演会・研修会などで	府県や市町村の広報紙で	テレビ・新聞・本などで	インターネット等から知った	その他	覚えていない	同和問題を知らない	無回答
全 体	2850	729	122	153	118	912	74	108	198	-	65	226	60	85
	100.0	25.6	4.3	5.4	4.1	32.0	2.6	3.8	6.9	-	2.3	7.9	2.1	3.0
20歳未満	99	10	-	2	-	67	1	-	2	-	-	3	12	2
	100.0	10.1	-	2.0	-	67.7	1.0	-	2.0	-	-	3.0	12.1	2.0
20歳代	287	36	4	10	2	189	2	-	13	-	3	11	12	5
	100.0	12.5	1.4	3.5	0.7	65.9	0.7	-	4.5	-	1.0	3.8	4.2	1.7
30歳代	446	60	2	21	4	302	6	3	9	-	7	19	6	7
	100.0	13.5	0.4	4.7	0.9	67.7	1.3	0.7	2.0	-	1.6	4.3	1.3	1.6
40歳代	353	79	3	20	7	197	3	4	13	-	5	14	3	5
	100.0	22.4	0.8	5.7	2.0	55.8	0.8	1.1	3.7	-	1.4	4.0	0.8	1.4
50歳代	561	177	30	41	39	82	14	23	53	-	19	61	8	14
	100.0	31.6	5.3	7.3	7.0	14.6	2.5	4.1	9.4	-	3.4	10.9	1.4	2.5
60歳代	588	194	55	29	37	33	29	43	66	-	18	54	10	20
	100.0	33.0	9.4	4.9	6.3	5.6	4.9	7.3	11.2	-	3.1	9.2	1.7	3.4
70歳以上	404	137	21	24	24	17	14	32	37	-	11	53	8	26
	100.0	33.9	5.2	5.9	5.9	4.2	3.5	7.9	9.2	-	2.7	13.1	2.0	6.4

同和問題や被差別部落を知った経緯について、年代別でみると、20 歳未満～40 歳代は「学校で教わった」、50 歳代～70 歳以上は「父母や家族から」が最も割合が高くなっている。次いで 20 歳未満は「同和問題を知らない」、20 歳代～40 歳代は「父母や家族から」、50 歳代は「学校で教わった」、60 歳代は「テレビ・新聞・本などで」、70 歳以上では「覚えていない」となっている。

「学校で教わった」の項目が、40 歳代と 50 歳代を境に回答割合が変化しているのは、1970 年前後から同和教育がかなりの学校で実施されるようになったことからである。

【問３　同和問題や被差別部落を知った経緯（最終学歴別）】

（上段：回答者数／下段：回答比率）（%）

	全体	父母や家族から	近所の人から	学校の友だちから	職場の同僚から	学校で教わった	講演会・研修会などで	府県や市町村の広報紙で	テレビ・新聞・本などで	インターネット等から知った	その他	覚えていない	同和問題を知らない	無回答
全 体	2850	729	122	153	118	912	74	108	198	-	65	226	60	85
	100.0	25.6	4.3	5.4	4.1	32.0	2.6	3.8	6.9	-	2.3	7.9	2.1	3.0
中学校など	384	117	29	15	37	23	13	33	34	-	9	36	18	20
	100.0	30.5	7.6	3.9	9.6	6.0	3.4	8.6	8.9	-	2.3	9.4	4.7	5.2
高等学校など	1066	291	51	64	47	304	35	37	77	-	21	93	19	27
	100.0	27.3	4.8	6.0	4.4	28.5	3.3	3.5	7.2	-	2.0	8.7	1.8	2.5
短大、専門学校など	559	117	12	30	13	286	7	15	21	-	13	29	6	10
	100.0	20.9	2.1	5.4	2.3	51.2	1.3	2.7	3.8	-	2.3	5.2	1.1	1.8
大学、大学院	527	127	9	28	9	236	9	9	39	-	9	34	7	11
	100.0	24.1	1.7	5.3	1.7	44.8	1.7	1.7	7.4	-	1.7	6.5	1.3	2.1

同和問題や被差別部落を知った経緯について、最終学歴別でみると、中学校などは「父母や家族から」の割合が最も高く、次いで「職場の同僚から」となり、高等学校など、短大、専門学校など、大学、大学院は「学校で教わった」の割合が最も高く、次いで「父母や家族から」となっている。

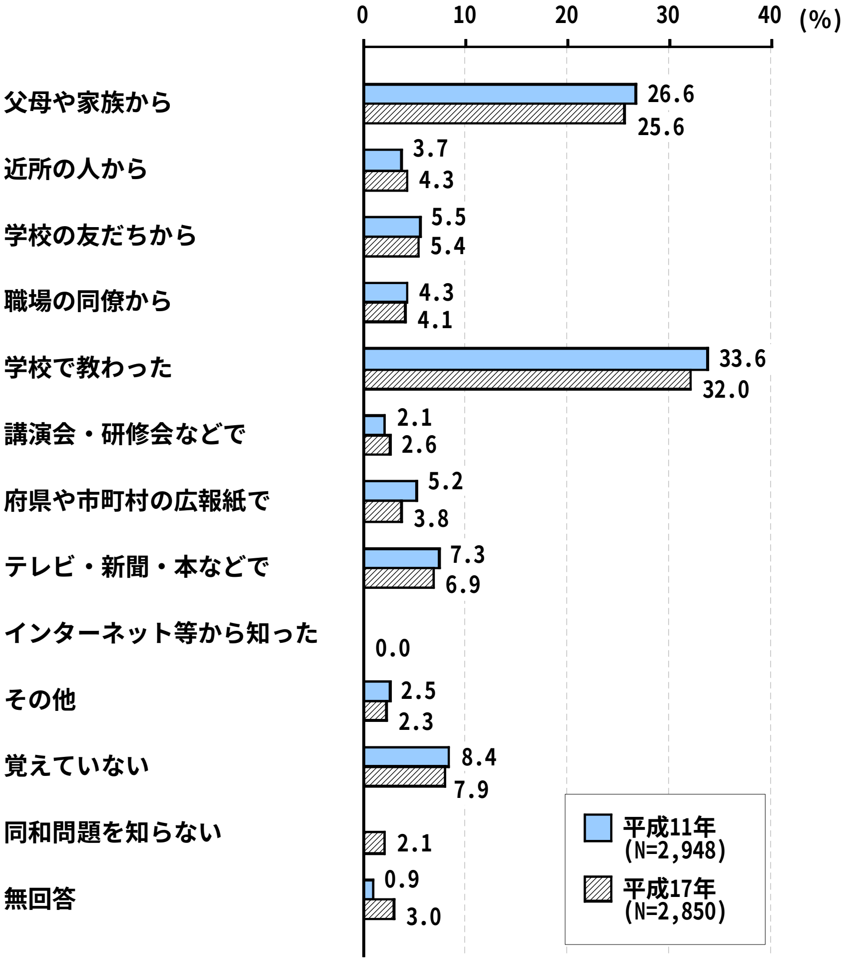
【問３　同和問題や被差別部落を知った経緯（支所別）】

（上段：回答者数／下段：回答比率）（%）

	全体	父母や家族から	近所の人から	学校の友だちから	職場の同僚から	学校で教わった	講演会・研修会などで	府県や市町村の広報紙で	テレビ・新聞・本などで	インターネット等から知った	その他	覚えていない	同和問題を知らない	無回答
全 体	2850	729	122	153	118	912	74	108	198	-	65	226	60	85
	100.0	25.6	4.3	5.4	4.1	32.0	2.6	3.8	6.9	-	2.3	7.9	2.1	3.0
堺支所	500	121	24	32	17	153	10	19	41	-	8	37	18	20
	100.0	24.2	4.8	6.4	3.4	30.6	2.0	3.8	8.2	-	1.6	7.4	3.6	4.0
中支所	409	83	22	28	19	138	5	17	29	-	11	34	9	14
	100.0	20.3	5.4	6.8	4.6	33.7	1.2	4.2	7.1	-	2.7	8.3	2.2	3.4
東支所	312	77	18	19	17	88	8	14	17	-	11	34	4	5
	100.0	24.7	5.8	6.1	5.4	28.2	2.6	4.5	5.4	-	3.5	10.9	1.3	1.6
西支所	463	142	16	26	21	129	18	20	30	-	9	33	6	13
	100.0	30.7	3.5	5.6	4.5	27.9	3.9	4.3	6.5	-	1.9	7.1	1.3	2.8
南支所	514	140	16	24	17	168	15	18	36	-	10	40	12	18
	100.0	27.2	3.1	4.7	3.3	32.7	2.9	3.5	7.0	-	1.9	7.8	2.3	3.5
北支所	522	133	21	20	18	192	16	16	35	-	14	36	10	11
	100.0	25.5	4.0	3.8	3.4	36.8	3.1	3.1	6.7	-	2.7	6.9	1.9	2.1
美原支所	130	33	5	4	9	44	2	4	10	-	2	12	1	4
	100.0	25.4	3.8	3.1	6.9	33.8	1.5	3.1	7.7	-	1.5	9.2	0.8	3.1

同和問題や被差別部落を知った経緯について、支所別でみると、「父母や家族から」は西支所でのみ３割を超えている。「学校で教わった」の項目では、支所による最も大きい差は、北支所と西支所で 8.9 ポイントとなっている。

【問３　同和問題や被差別部落を知った経緯（前回調査との比較）】



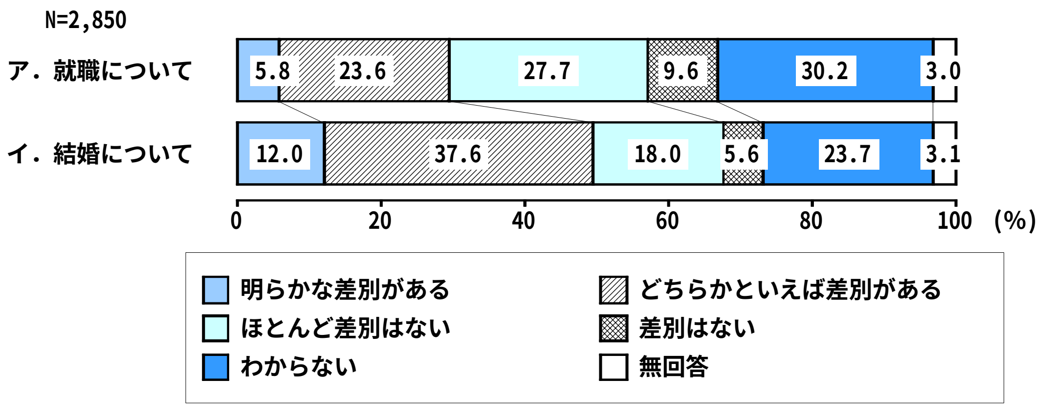
※前回調査時には、「インターネット等から知った」と「同和問題を知らない」の選択肢はなかった。

同和問題や被差別部落を知った経緯について、前回調査と比較すると、大きな差はなく、「学校で教わった」、「父母や家族から」の割合は前回同様に高くなっている。

問４　現在、就職や結婚について部落差別があると思いますか。

（それぞれあてはまる番号１つに○）

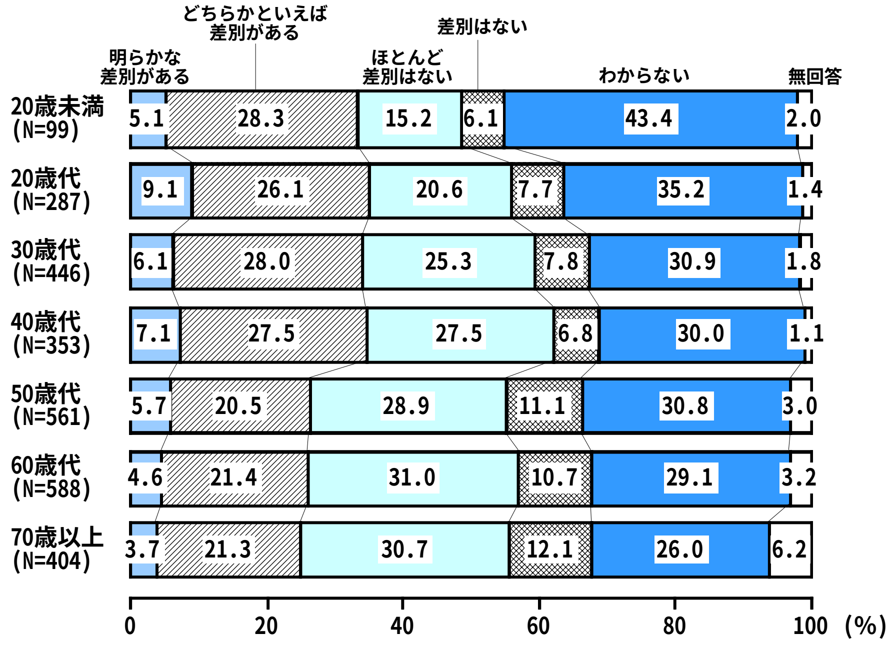
【図４　就職や結婚時の部落差別について】



就職や結婚時の部落差別について、「ア．就職について」は「差別はない（「ほとんど差別はない」と「差別はない」を合わせた層）」は 37.3%、「差別がある（「明らかな差別がある」と「どちらかといえば差別がある」を合わせた層）」は 29.4%と、「差別はない」が「差別がある」より 7.9 ポイント高くなっている。

一方、「イ．結婚について」は、「差別がある」は 49.6%、「差別はない」は 23.6%と「差別がある」が「差別はない」より 26.0 ポイント高くなっている。

【問４「ア．就職について」（年代別）】

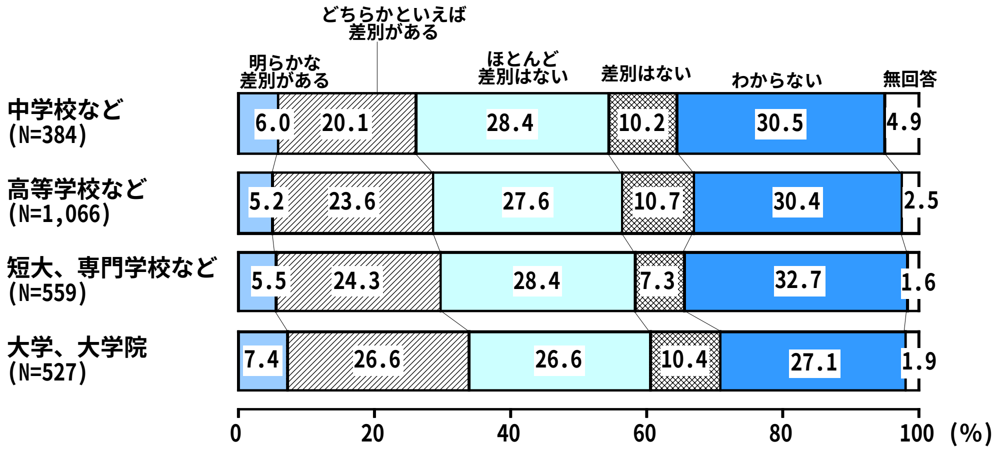


「ア．就職について」を年代別でみると、「差別はない」の割合は加齢とともに高くなって

いる。また、20 歳未満～40 歳代では「差別はない」よりも「差別がある」の割合が高くなっている。

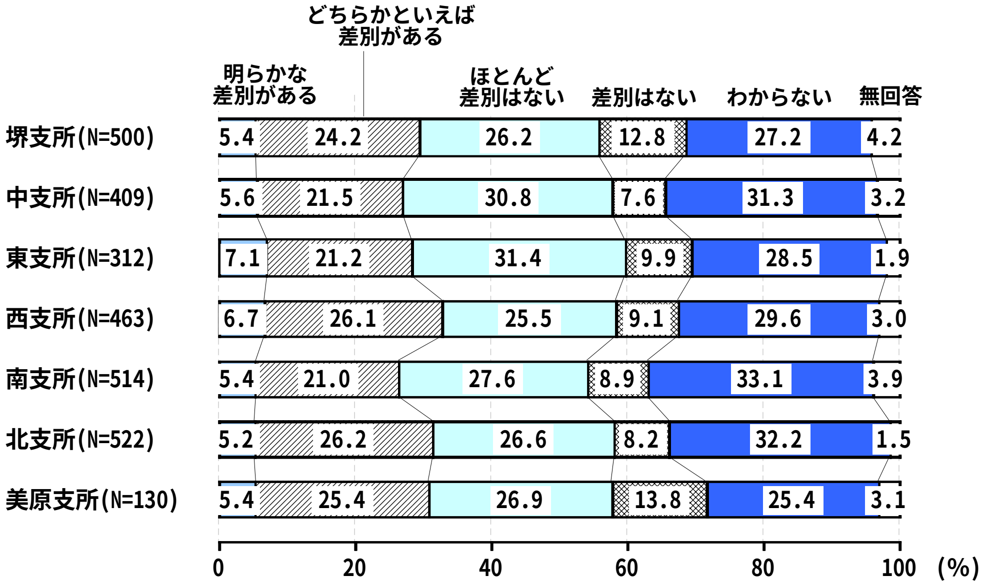
就職について、若い世代ほど差別があると認識している割合が高くなっている。また、問３同様に、40 歳代未満と 50 歳代以上で大きな差が表れている。

【問４「ア．就職について」（最終学歴別）】



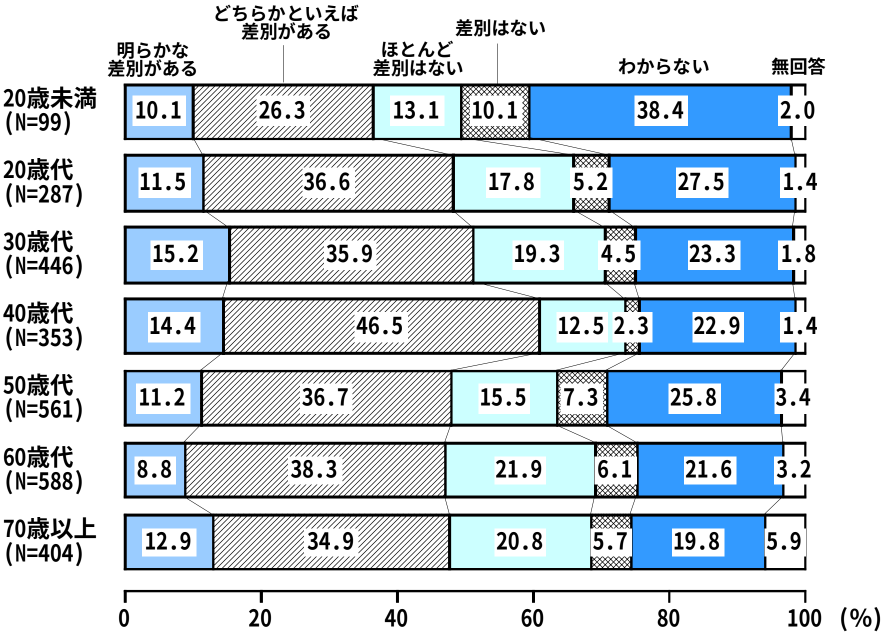
「ア．就職について」を最終学歴別でみると、「差別がある」の割合は高学歴ほど高くなる傾向にある。

【問４「ア．就職について」（支所別）】



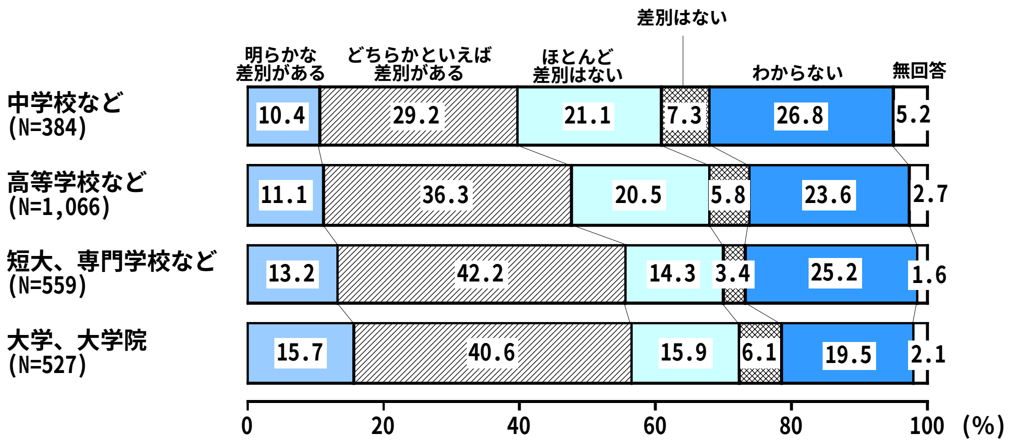
「ア．就職について」を支所別でみると、「差別がある」の割合は、西支所（32.8%）が最も高く、北支所（31.4%）、美原支所（30.8%）と続き３割を超えている。「差別はない」の割合は、東支所（41.3%）が最も高く、美原支所（40.7%）、堺支所（39.0%）と続いている。

【問４「イ．結婚について」（年代別）】



「イ．結婚について」を年代別でみると、「差別がある」と回答した割合は 40 歳代で 60.9%と最も高く、20 歳未満で 36.4%と最も低くなっており、40 歳代を頂点に山型をなしている。中でも、20 歳未満では結婚自体に実感がないこともあると思われるが、「差別がある」と回答した割合は他の年代よりも１割以上低くなっている。一方、「差別はない」は年代に関わらず３割以下となっている。

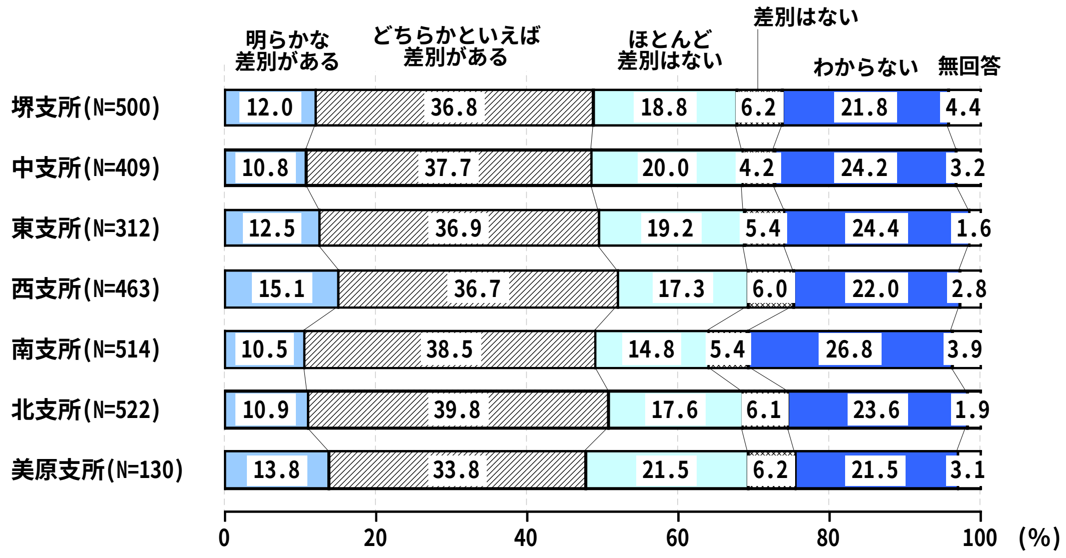
【問４「イ．結婚について」（最終学歴別）】



「イ．結婚について」を最終学歴別でみると、「差別がある」の割合は、高学歴になるほど高くなる傾向が見られ、短大、専門学校など、大学、大学院で過半数を超えており、中学校など、高等学校などに比べて約１割程度高くなっている。

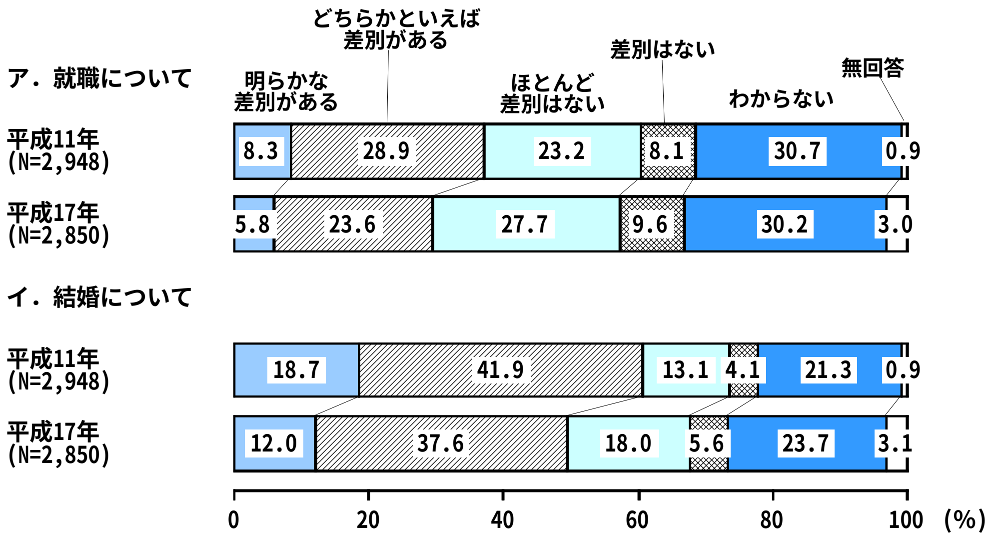
これは、同和問題について、より多くを学ぶ機会が増えることも要因として考えられる。

【問４「イ．結婚について」（支所別）】



「イ．結婚について」を支所別でみると、「差別がある」は、西支所（51.8%）が最も高く、北支所（50.7%）、東支所（49.4%）と続いている。「差別はない」は、美原支所（27.7%）が最も高く、堺支所（25.0%）、東支所（24.6%）と続いている。

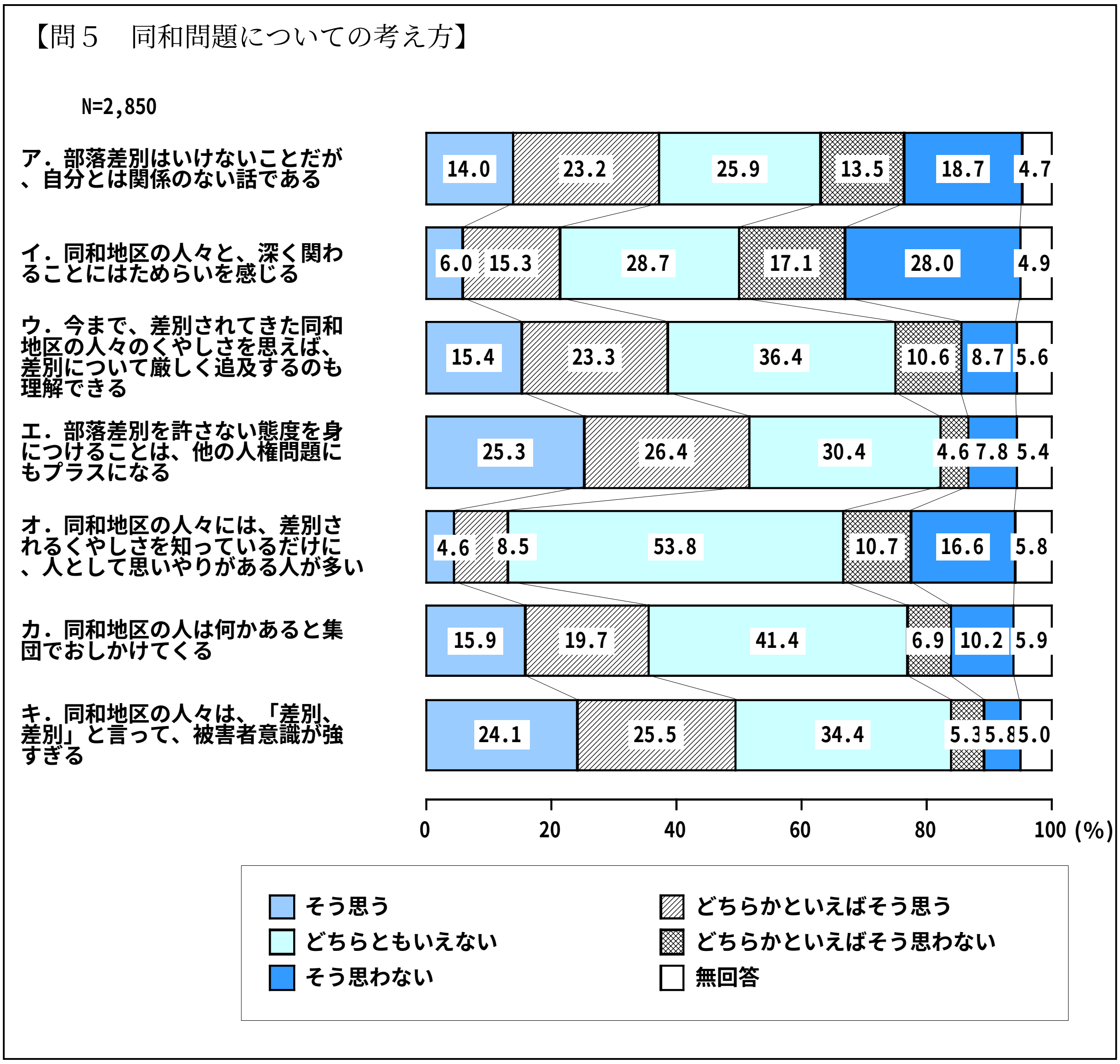
【問４　就職や結婚時の部落差別について（前回調査との比較）】



就職や結婚時の部落差別について、前回調査と比較すると、「ア．就職について」と「イ．結婚について」の両方で「明らかな差別がある」と「どちらかといえば差別がある」の割合がともに減少し、「差別はない」と「ほとんど差別はない」の割合がともに増加している。「わからない」とした回答は前回調査に比べて大きな変動はないが、前回調査で「差別がある」とした層が今回の調査では「差別はない」と回答したためと考えられる。

問５　同和問題について、次のような意見がありますが、あなたはどう思いますか。

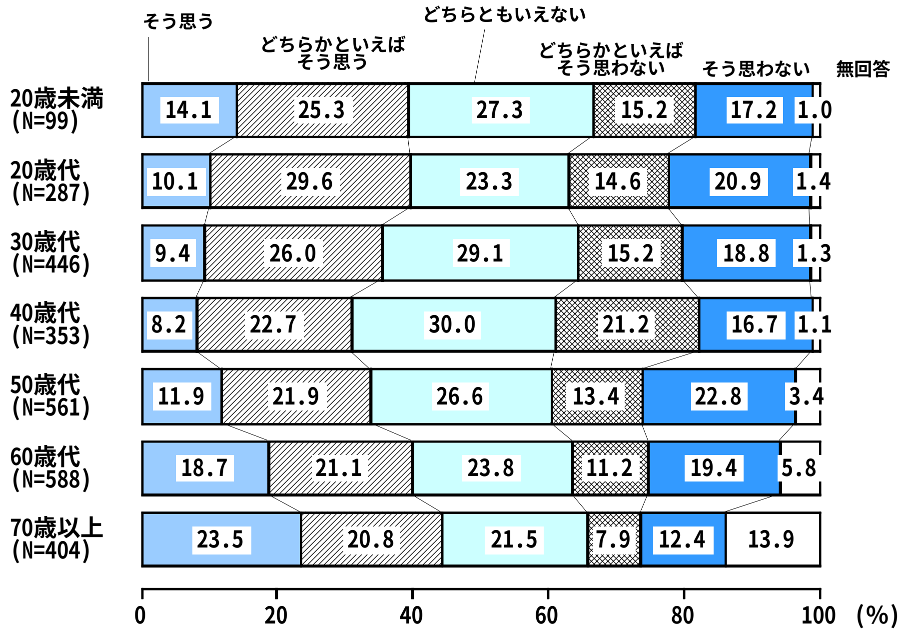
（ア～キのそれぞれについて、あてはまるもの１つに○）



同和問題の考え方については、「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」、「オ．同和地区の人々には、差別されるくやしさを知っているだけに、人として思いやりがある人が多い」では「否定派」の割合が「肯定派」を上回っている。

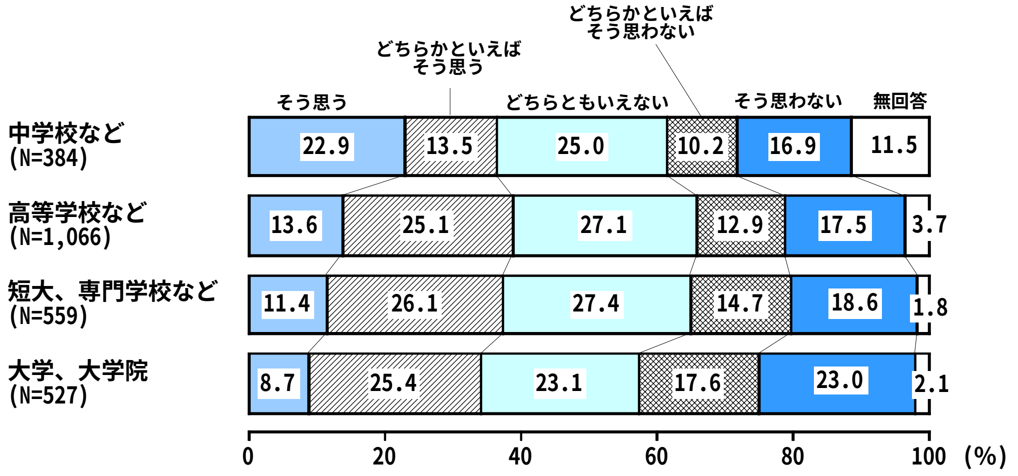
「エ. 部落差別を許さない態度を身につけることは、他の人権問題にもプラスになる」、「キ. 同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、被害者意識が強すぎる」では、「肯定派」が約半数となっている。

【問５「ア．部落差別はいけないことだが、自分とは関係のない話である」（年代別）】



「ア．部落差別はいけないことだが、自分とは関係のない話である」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 40 歳代が最も低くなっている。「否定派」の割合は 70 歳以上を除くすべての年代で３割以上となっている。

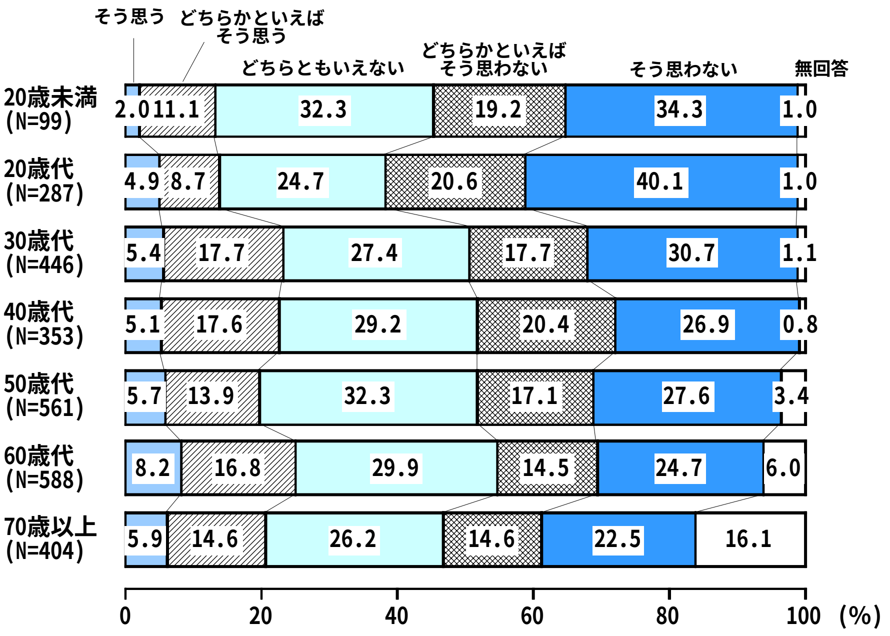
【問５「ア．部落差別はいけないことだが、自分とは関係のない話である」（最終学歴別）】



「ア．部落差別はいけないことだが、自分とは関係のない話である」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は高学歴になるほど高くなっている。また、「肯定派」の割合は、大きな差はみられないが、そのうち「そう思う」の割合は高学歴になるほど低くなっている。

高学歴ほど、自分と同和問題との関連性を認める傾向が高くなっている。

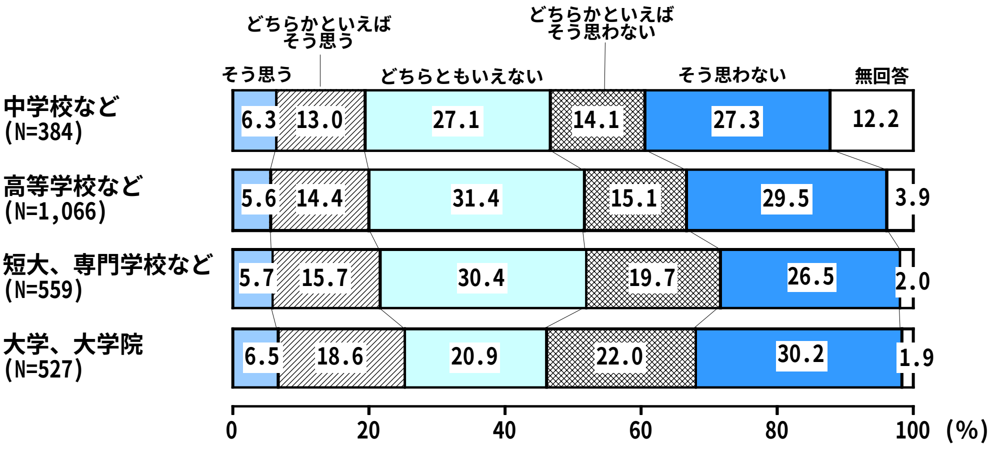
【問５「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」（年代別）】



「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 60 歳代で 25.0%と最も高く、20 歳未満で 13.1%と最も低くなっている。

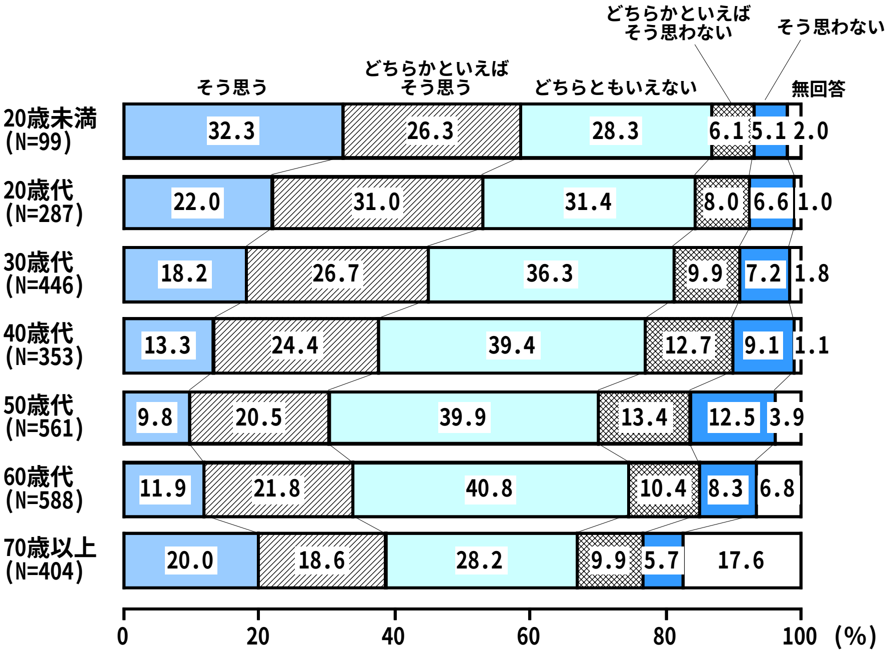
また、20 歳未満と 20 歳代では「肯定派」の割合が他の年代に比べて低く、「否定派」の割合が過半数を占めていることから、同和地区の人との関わりにためらいを感じる人は少ないと思われる。

【問５「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」（最終学歴別）】



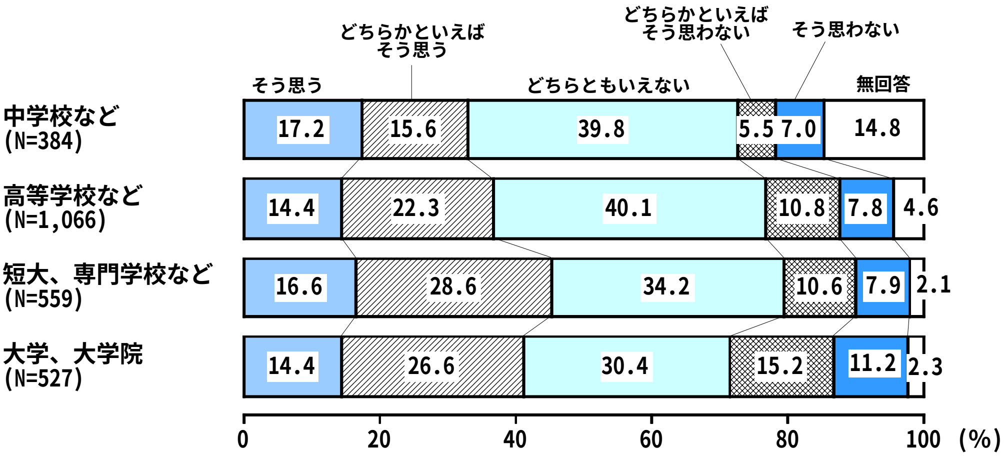
「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」、「否定派」ともに高学歴ほど割合が高くなっている。

【問５「ウ．今まで、差別されてきた同和地区の人々のくやしさを思えば、差別について厳しく追及するのも理解できる」（年代別）】



「ウ．今まで、差別されてきた同和地区の人々のくやしさを思えば、差別について厳しく追及するのも理解できる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 20 歳未満～50 歳代にかけては加齢とともに低くなっている。また、「肯定派」の割合は 20 歳未満と 20 歳代では過半数を占め、「否定派」の割合は 40 歳代と 50 歳代で 2 割を超えている。

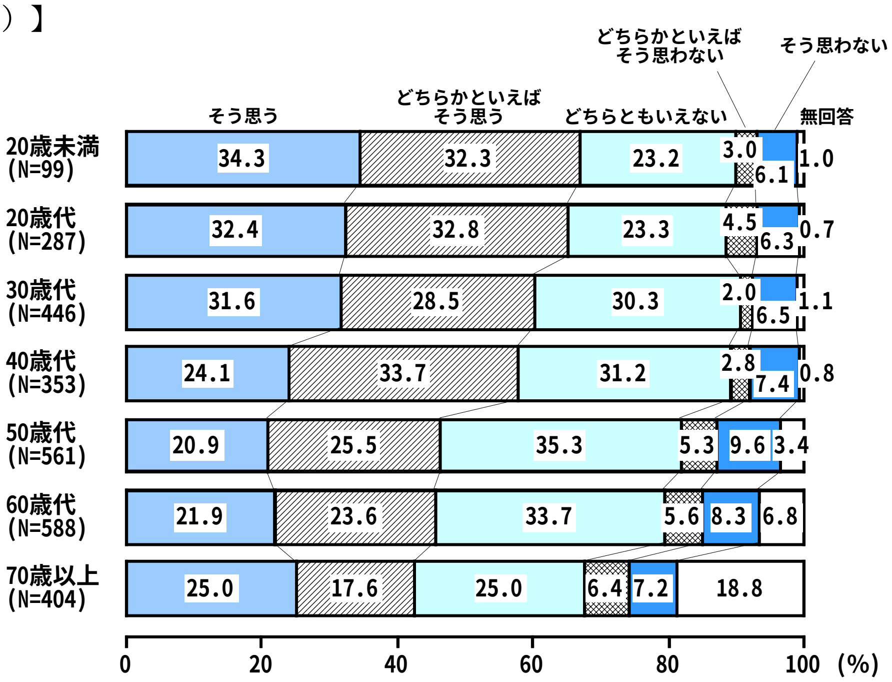
【問５「ウ．今まで、差別されてきた同和地区の人々のくやしさを思えば、差別について厳しく追及するのも理解できる」（最終学歴別）】



「ウ．今まで、差別されてきた同和地区の人々のくやしさを思えば、差別について厳しく追及するのも理解できる」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は大学、大学院で 26.4%と最も高く、中学校などで 12.5%と最も低くなっており、高学歴になるほど高くなる傾

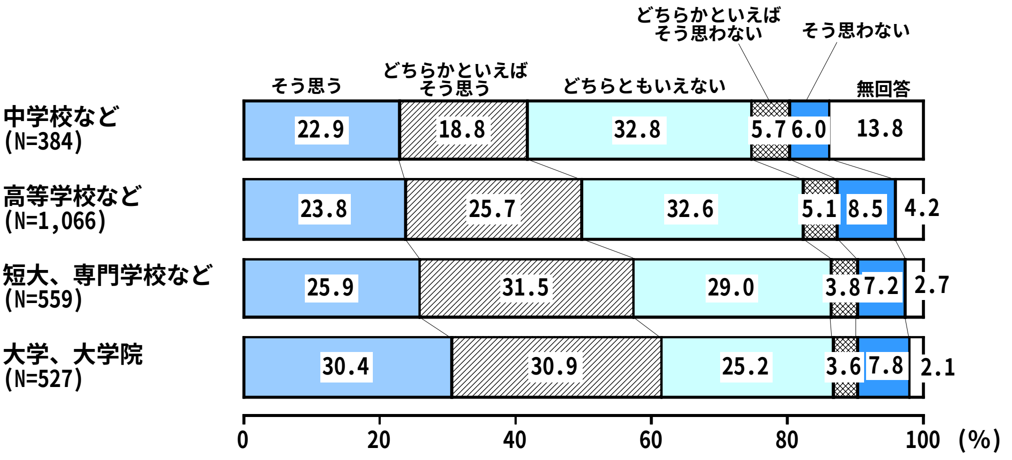
向がみられる。また、「肯定派」の割合は、短大、専門学校などで 45.2%と最も高く、中学校などで 32.8%と最も低くなっているが、「そう思う」の割合に大きな差はみられなかった。

【問５「エ．部落差別を許さない態度を身につけることは、他の人権問題にもプラスになる」（年代別）】



「エ．部落差別を許さない態度を身につけることは、他の人権問題にもプラスになる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 20 歳未満で 66.6%と最も高く、40 歳代以下の年代では過半数を超えているが、50 歳代から加齢とともに低くなり 70 歳以上で 42.6%と最も低くなっている。また、20 歳代と 40 歳代以上では「否定派」が１割以上となっている。

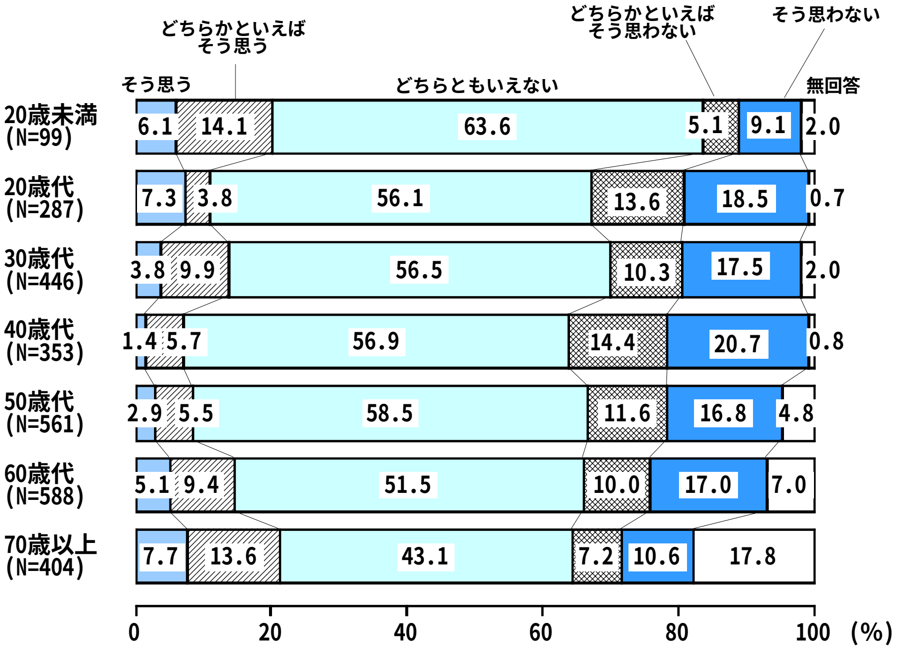
【問５「エ．部落差別を許さない態度を身につけることは、他の人権問題にもプラスになる」（最終学歴別）】



「エ．部落差別を許さない態度を身につけることは、他の人権問題にもプラスになる」につ

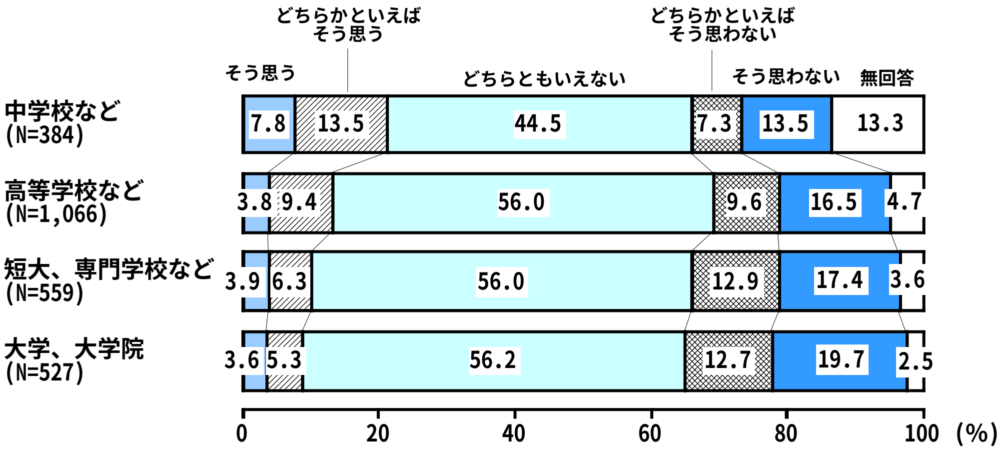
いて、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は大学、大学院で 61.3%と最も高く、中学校などで 41.7%と最も低くなっており、高学歴になるほど高くなっている。

【問５「オ．同和地区の人々には、差別されるくやしさを知っているだけに、人として思いやりがある人が多い」（年代別）】



「オ．同和地区の人々には、差別されるくやしさを知っているだけに、人として思いやりがある人が多い」について、年代別でみると、20 歳未満と 70 歳以上を除く年代では「否定派」の割合が「肯定派」の割合を上回っている。

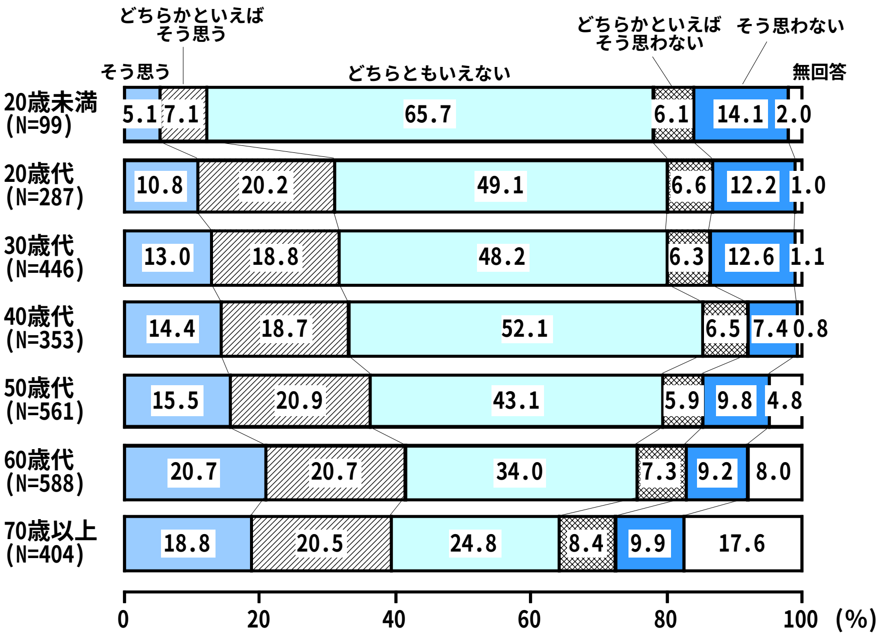
【問５「オ．同和地区の人々には、差別されるくやしさを知っているだけに、人として思いやりがある人が多い」（最終学歴別）】



「オ．同和地区の人々には、差別されるくやしさを知っているだけに、人として思いやりが

ある人が多い」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は中学校などで 21.3%と最も高く、大学、大学院で 8.9%と最も低くなっており、高学歴になるほど低くなっている。また、高学歴ほど「否定派」の割合は高く、短大、専門学校など、大学、大学院で３割を超えている。

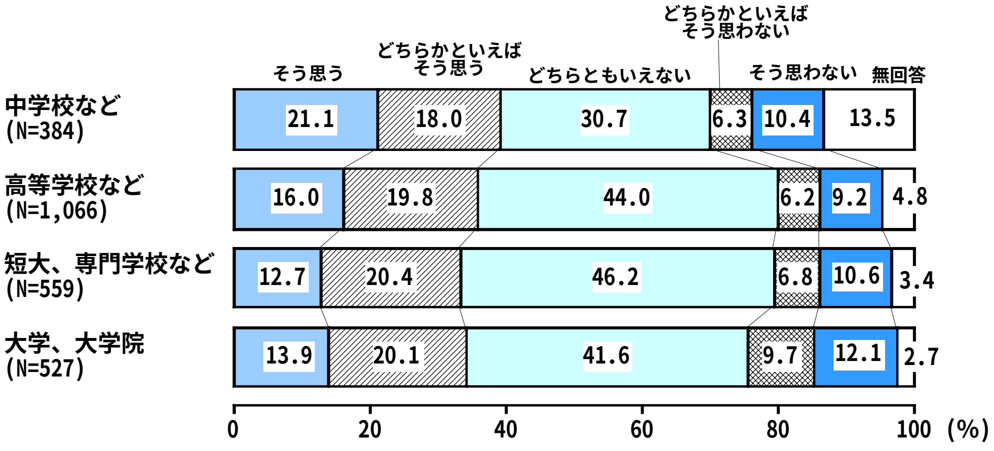
【問５「カ．同和地区の人は何かあると集団でおしかけてくる」（年代別）】



「カ．同和地区の人は何かあると集団でおしかけてくる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 60 歳代で 41.4%と最も高く、20 歳未満で 12.2%と最も低くなっている。

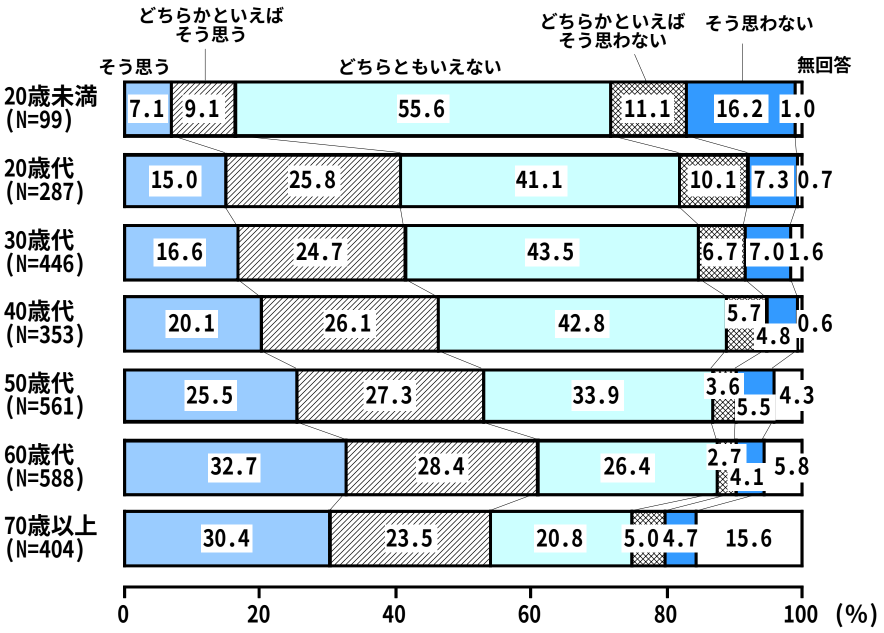
年代が上るほど、「同和地区の人は何かあると集団でおしかけてくる」というイメージが強くなっている。こうした偏見は、全年代にわたって浸透していることがうかがえる。

【問５「カ．同和地区の人は何かあると集団でおしかけてくる」（最終学歴別）】



「カ．同和地区の人は何かあると集団でおしかけてくる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は中学校などで 39.1%、「否定派」の割合は大学、大学院で 21.8%と最も高くなっている。

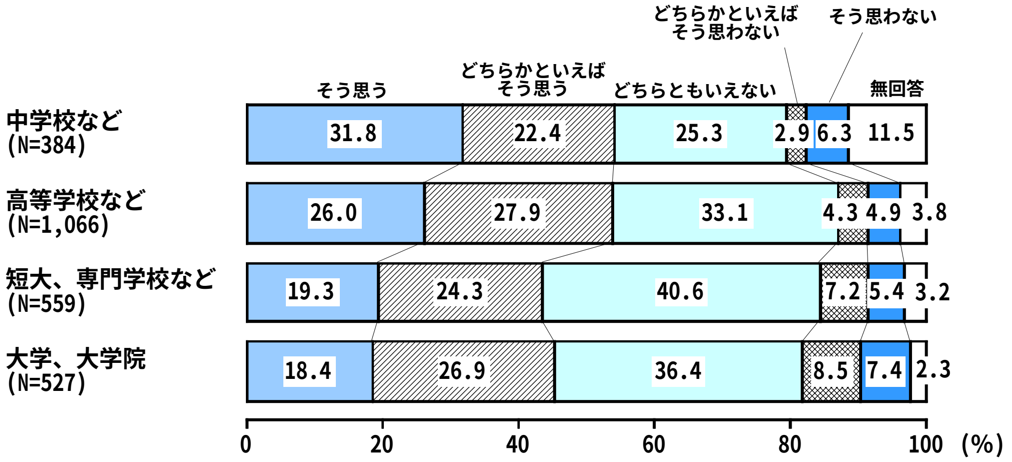
【問５「キ．同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、被害者意識が強すぎる」（年代別）】



「キ．同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、被害者意識が強すぎる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 60 歳代で 61.1%と最も高く、20 歳未満で 16.2%と最も低くなっており、20 歳未満～60 歳代にかけては加齢とともに高くなっている。また、20 歳未満では「肯定派」の割合が「否定派」の割合よりも低くなっている。

このことからも、20 歳未満と 20 歳代以上で考え方や意識についての差があると思われる。

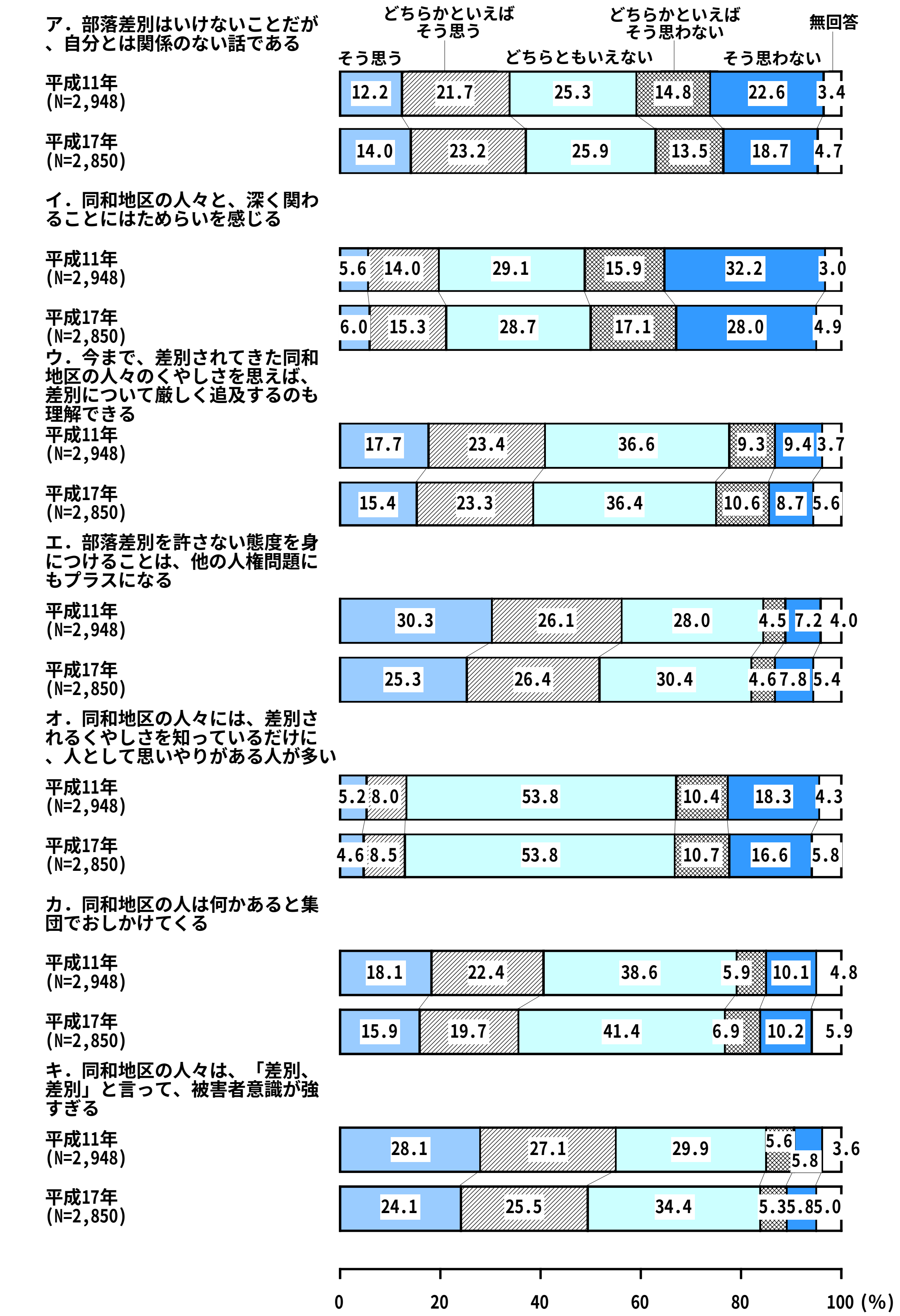
【問５「キ．同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、被害者意識が強すぎる」（最終学歴別）】



「キ．同和地区の人々は、「差別、差別」と言って、被害者意識が強すぎる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は中学校など、高等学校などで過半数を占めている。また、「そう思う」の割合は中学校などで 31.8%最も高く、大学、大学院で 18.4%と最も低くなっており、高学歴になるほど低くなっている。

「否定派」の割合は高学歴になるにつれて高くなり、短大、専門学校など、大学、大学院では１割を超えている。

【問５　同和問題についての考え方（前回調査との比較）】

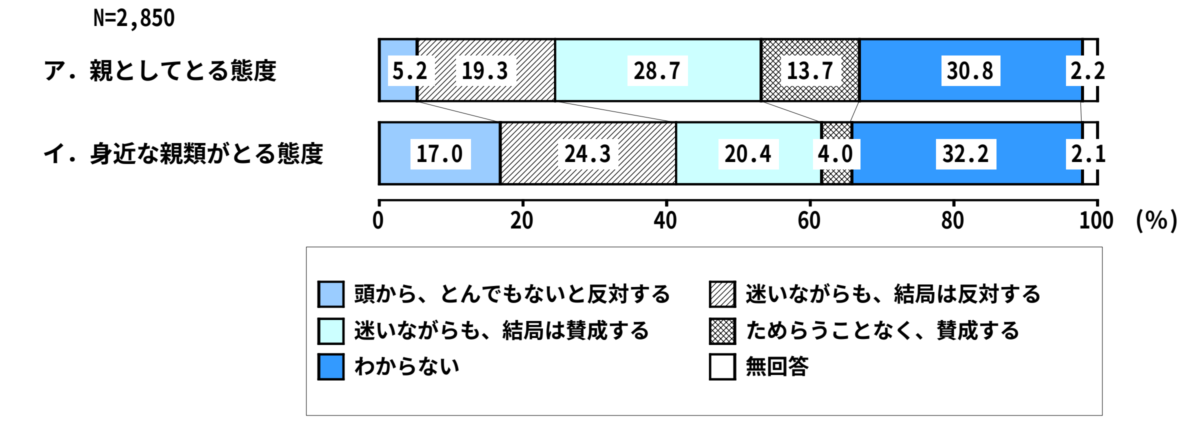


同和問題についての考え方について、前回調査と比較すると、「ア．部落差別はいけないこ

とだが、自分とは関係のない話である」、「イ．同和地区の人々と、深く関わることにはためらいを感じる」の項目で、「肯定派」の割合が増加し、それ以外の項目では減少している。

問６　もし仮に、あなたのお子さん（お子さんがいない場合は、いると仮定してお答えください）が恋愛をし、結婚をしたいといっている相手が同和地区の人であった場合についてお聞きします。（それぞれあてはまるもの１つに○）

【問６　同和地区の方との結婚について】

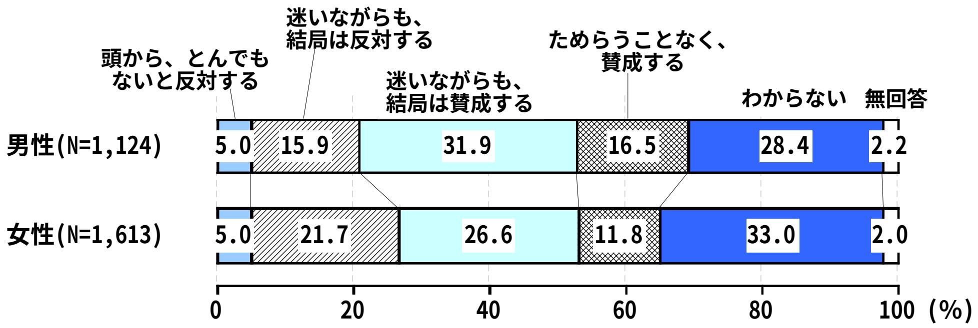


同和地区の方との結婚については、「ア．親としてとる態度」では、「肯定派（「迷いながらも、結局は賛成する」と「ためらうことなく、賛成する」を合わせた層）」が「否定派（「頭から、とんでもないと反対する」と「迷いながらも、結局は反対する」を合わせた層）」よりも、17.9 ポイント高くなっている。

「イ．身近な親類がとる態度」では、逆に「否定派」が「肯定派」よりも 16.9 ポイント高くなっている。

また、「ア．親としてとる態度」、「イ．身近な親類がとる態度」ともに、「わからない」が約３割となっている。

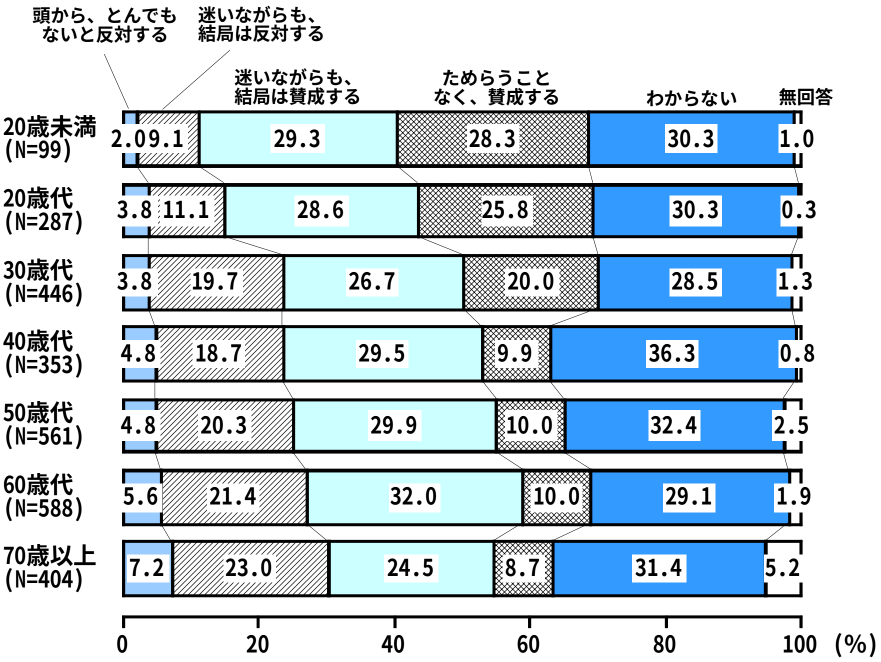
【問６「ア．親としてとる態度」（性別）】



「ア．親としてとる態度」について、性別でみると男性では「肯定派」は 48.4%、「否定派」は 20.9%、女性では「肯定派」は 38.4%、「否定派」は 26.7%となっており、女性の方が「肯

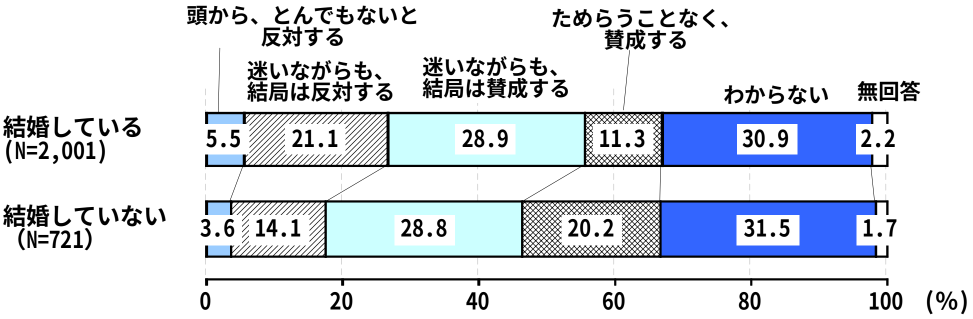
定派」の割合が低く、「否定派」の割合が高くなっている。

【問６「ア．親としてとる態度」（年代別）】



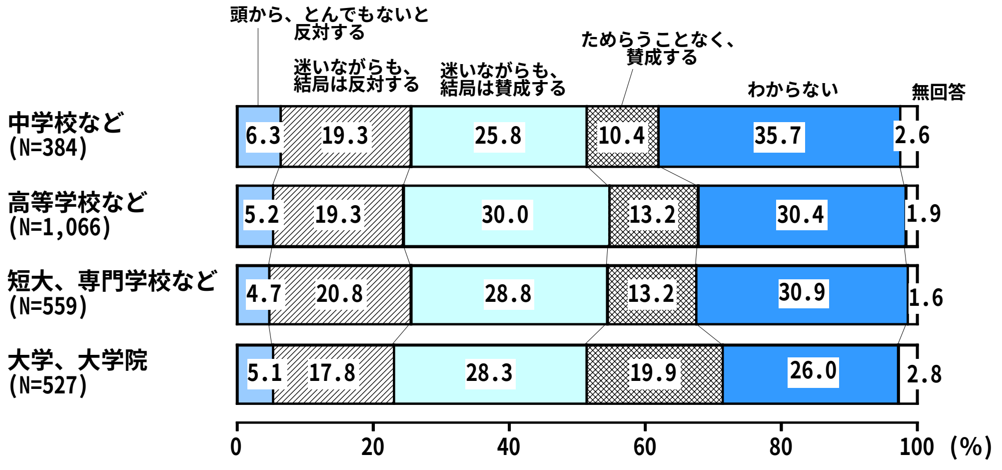
「ア．親としてとる態度」について、年代別でみると、「否定派」の割合は 20 歳未満で 11.1% と最も低く、加齢とともに高くなっており、70 歳以上で 30.2%と最も高くなっている。
逆に、「肯定派」の割合は 20 歳未満が最も高く、加齢とともに低くなる傾向にある。全体的に親としてとる態度は「賛成」の割合が高くはなっているが、約３割の人は「わからない」と回答しており、どちらになるかで大きく変化があらわれることになる。

【問６「ア．親としてとる態度」（結婚の有無別）】



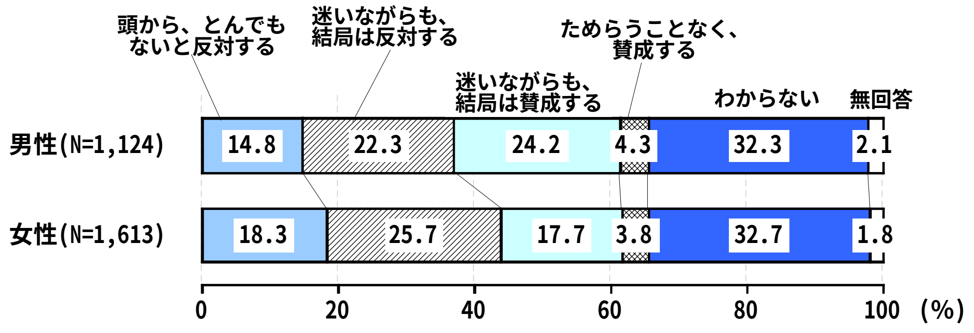
「ア．親としてとる態度」について、結婚の有無別でみると、「結婚している」では、「否定派」の割合が結婚していないより 8.9 ポイント、「結婚していない」では、「肯定派」の割合が結婚しているより 8.8 ポイント高くなっており、傾向としては、結婚している人の方が否定的意見が多くなっている。

【問６「ア．親としてとる態度」（最終学歴別）】



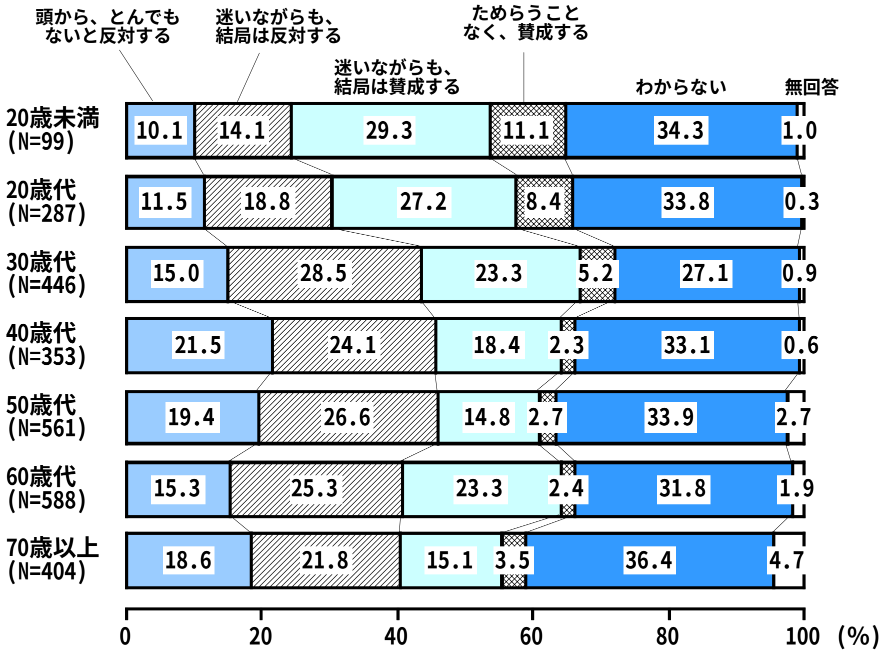
「ア．親としてとる態度」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は学歴による大きな差はありませんが、「肯定派」の割合は高学歴ほど高くなっている。特に「ためらうことなく賛成する」の割合は大学、大学院で19.9%と他に比べて６ポイント以上高くなっている。

【問６「イ．身近な親類がとる態度」（性別）】



「イ．身近な親類がとる態度」について、性別でみると、男性では「肯定派」は28.5%、「否定派」は37.1%、女性では、「肯定派」は21.5%、「否定派」は44.0%となっており、女性の方が男性に比べて、「肯定派」の割合は低く、「否定派」の割合は高くなっている。

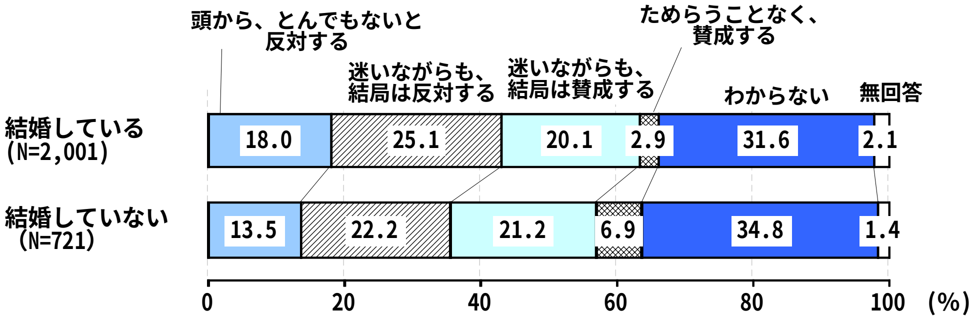
【問６「イ．身近な親類がとる態度」（年代別）】



「イ．身近な親類がとる態度」について、年代別でみると、「否定派」の割合は 30 歳代～50 歳代でやや高くなっている。「肯定派」は 20 歳未満で約４割、70 歳以上で約２割と年代によって差がみられる。

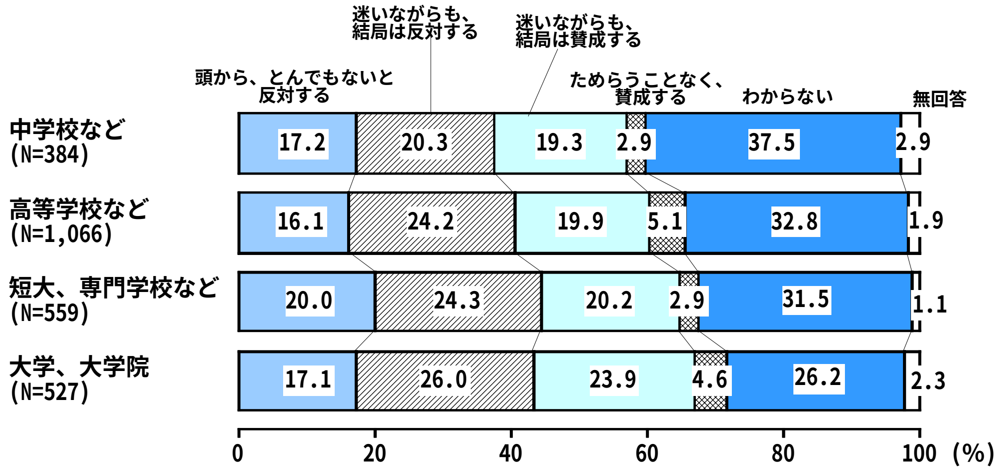
「ア．親としてとる態度」に比べて、「イ．身近な親類がとる態度」では、反対するだろうと予測している人の割合が高くなっている。

【問６「イ．身近な親類がとる態度」（結婚の有無別）】



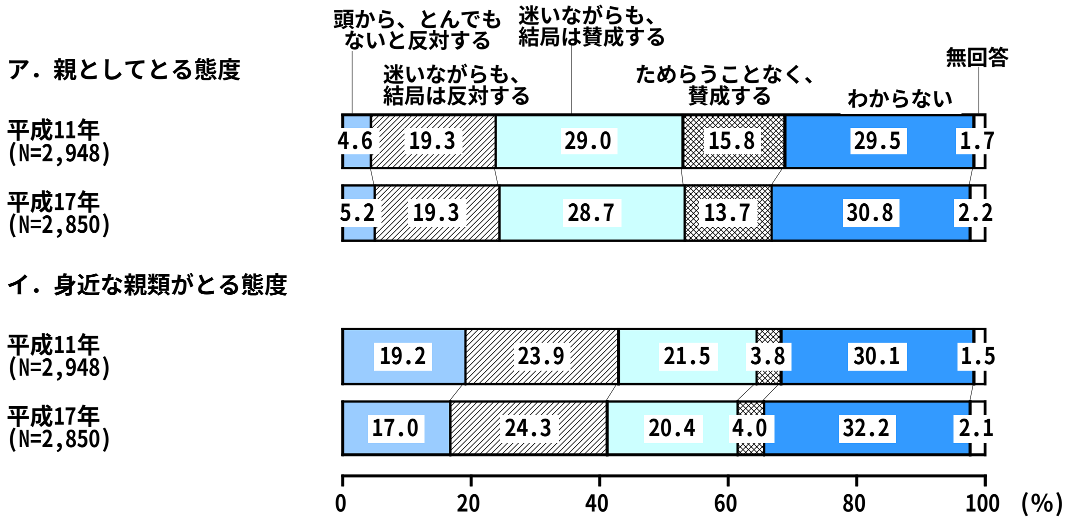
「イ．身近な親類がとる態度」について、結婚の有無別でみると、結婚しているでは「否定派」の割合が結婚していないよりも 7.4 ポイント高くなっている。

【問６「イ．身近な親類がとる態度」（最終学歴別）】



「イ．身近な親類がとる態度」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は、高等学校など以上で４割以上をしめており、「肯定派」の割合はすべての学歴で３割以下となっている。「ア．親としてとる態度」よりも、「否定派」の割合が高くなっている。

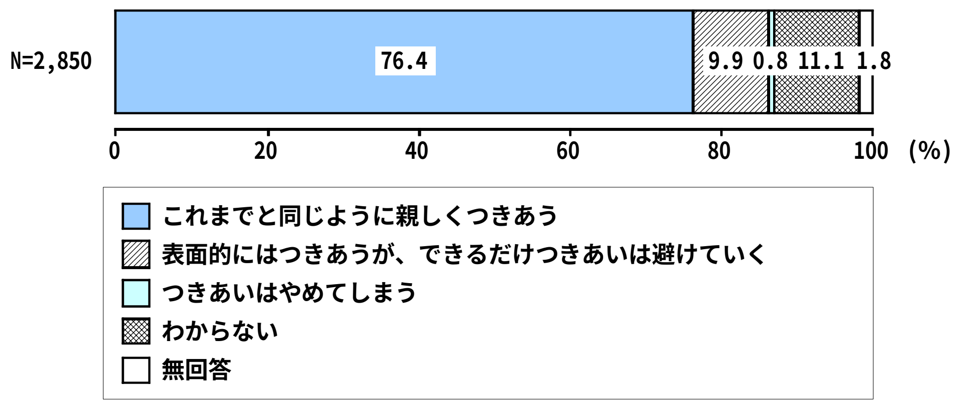
【問６　同和地区の方との結婚について（前回調査との比較）】



同和地区の方との結婚について、前回調査と比較すると、「ア．親としてとる態度」では、「否定派」が微増、「肯定派」が微減となっており、「イ．身近な親類がとる態度」では「否定派」、「肯定派」ともに微減となっている。大きな変動は見られない。

問７　仮に、日ごろから親しくつきあっている人が、なにかのことで同和地区出身の人であることがわかった場合、あなたはどうしますか。（あてはまるもの１つに○）

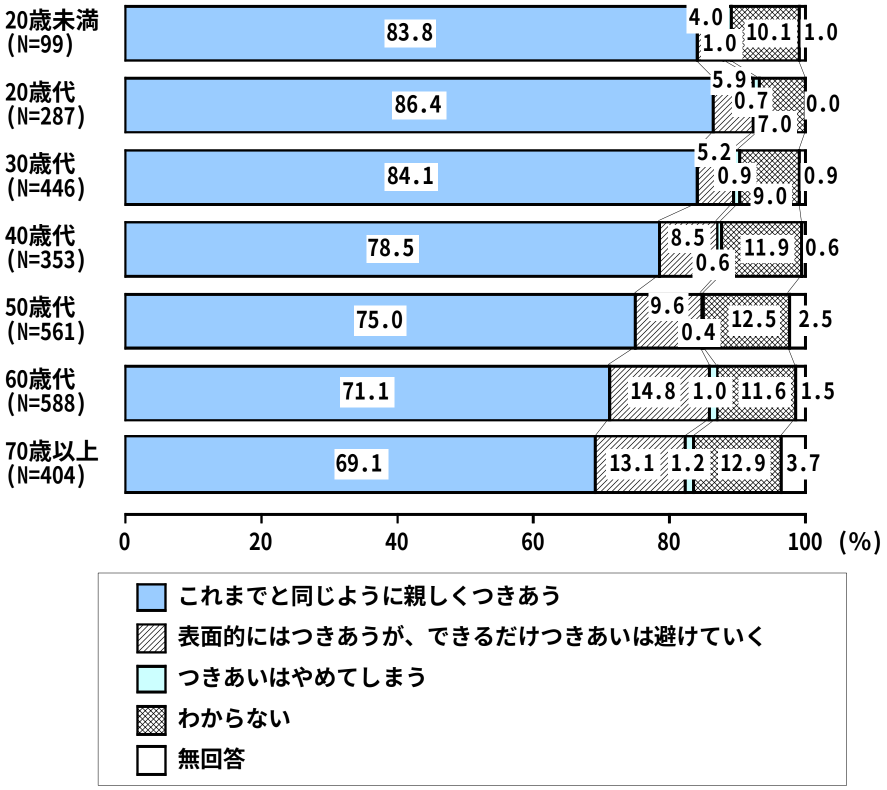
【問７　日ごろから親しくつきあっている人が同和地区出身者であった場合】



日ごろから親しくつきあっている人が同和地区出身者であった場合、「これまでと同じように親しくつきあう」（76.4%）が最も高く、次いで「わからない」（11.1%）となっている。一方、「つきあいは避ける・やめる（「表面的にはつきあうが、できるだけつきあいは避けていく」と「つきあいはやめてしまう」を合わせた層）」は１割程度となっている。

ほとんどの方が日ごろから親しい人が、同和地区出身者であっても問題はないと考えている。同和地区出身者に対する理解が深まってきていると考えられる。

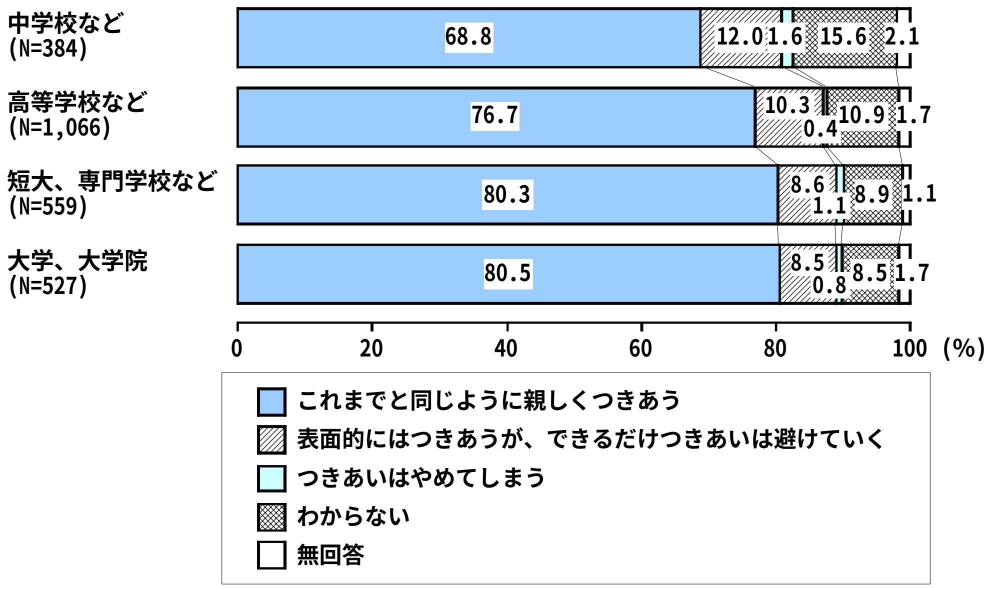
【問７　日ごろから親しくしている人が同和地区出身者であった場合（年代別）】



日ごろから親しくつきあっている人が同和地区出身者であった場合について、年代別でみると、「これまでと同じように親しくつきあう」は 20 歳未満で 83.8%、70 歳以上で 69.1%と加齢とともに低くなっている。また、50 歳以上では「つきあいは避ける・やめる」が 1 割以上となっている。

60 歳以上の方にとっては、いくら日ごろから親しく付き合っている人でも、同和地区出身者であることについては、他の年代に比べて抵抗感があるように見受けられる。

【問７　日ごろから親しくしている人が同和地区出身者であった場合（最終学歴別）】

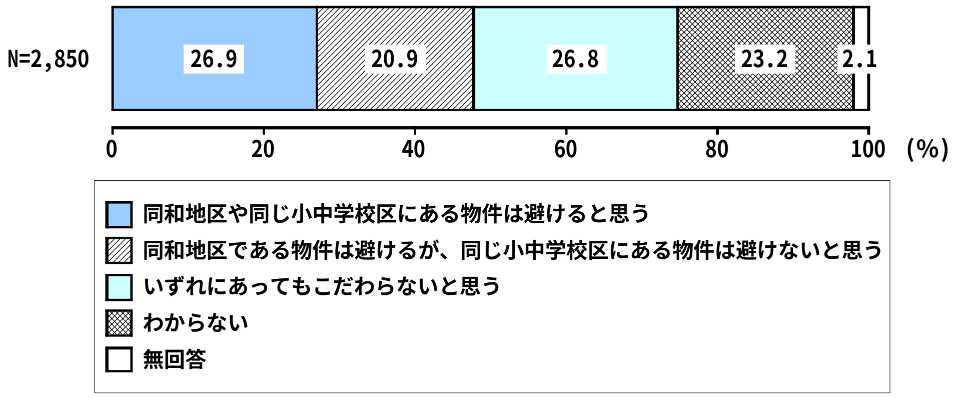


日ごろから親しくつきあっている人が同和地区出身者であった場合について、最終学歴別でみると、「これまでと同じように親しくつきあう」の割合は大学、大学院で 80.5%、中学校などで 68.8%と、高学歴になるほど高くなっている。また、「つきあいは避ける・やめる」の割合は学歴に関わらず１割前後となっている。

問８　もしあなたが、家を購入したり、マンションを借りたりするなど住宅を選ぶ際に、同和地区や同和地区が小中学校区にある物件ならばどのようにすると思いますか。

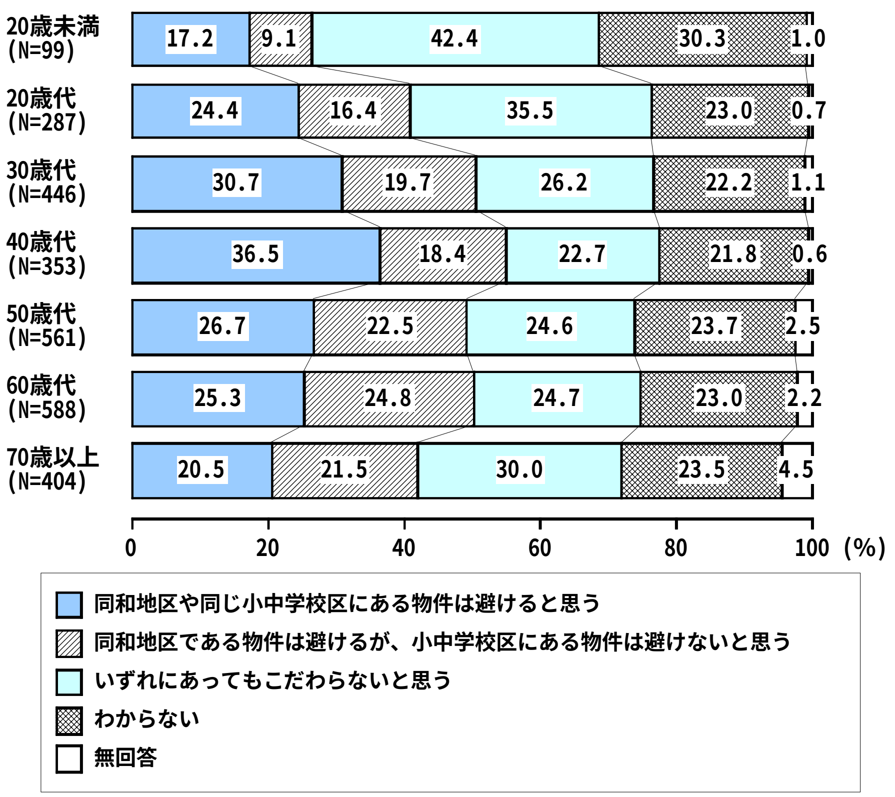
（あてはまるもの１つに○）

【図８　同和地区内で住宅を購入、賃貸すること】



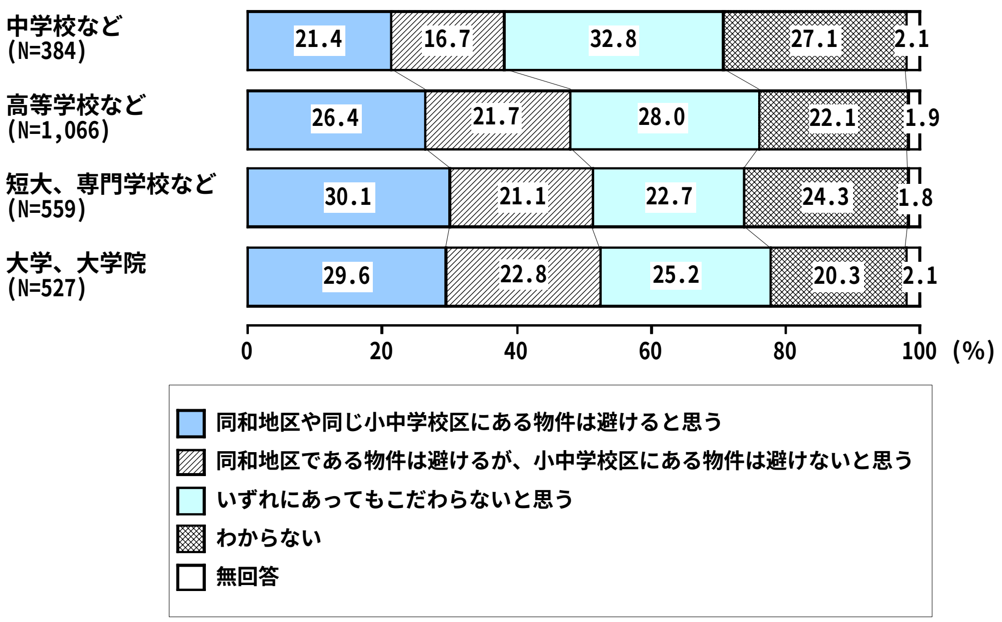
同和地区内で住宅を購入、賃貸することについては、「同和地区や同じ小中学校区にある物件は避けると思う」（26.9%）、「いずれにあってもこだわらないと思う」（26.8%）、「わからない」（23.2%）が僅差となっている。

【問８　同和地区内で住宅を購入、賃貸すること（年代別）】



同和地区内で住宅を購入、賃貸することについて、年代別でみると、「同和地区や同じ小中学校にある物件は避けると思う」の割合は 40 歳代で 36.5%と最も高く、20 歳未満で 17.2%と最も低くなっており、40 歳代を頂点に山型をなしている。「いずれにあってもこだわらないと思う」の割合は 20 歳未満で４割、40 歳代で２割、70 歳以上で３割と年代によって差がみられる。

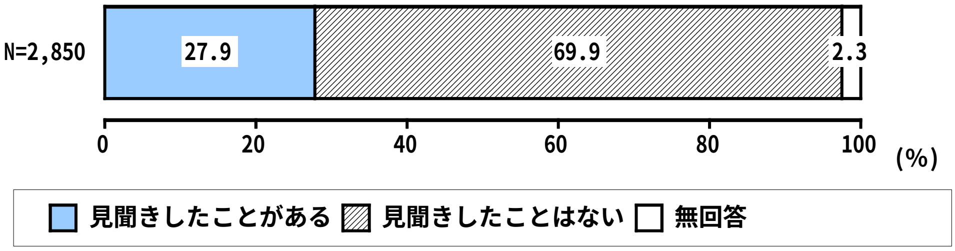
【問８　同和地区内で住宅を購入、賃貸すること（最終学歴別）】



同和地区内で住宅を購入、賃貸することについて、最終学歴別でみると、「同和地区や同じ小中学校にある物件は避けると思う」の割合は中学校などで 21.4%、短大、専門学校など 30.1%となっている。高学歴になるほど高くなる傾向にある。「いずれにあってもこだわらないと思う」の割合は中学校などで 32.8%、短大、専門学校など 22.7%となっており、このことから、高学歴ほど、同和地区やその周辺に住むことに対して否定的な意見を持っていると考えられる。

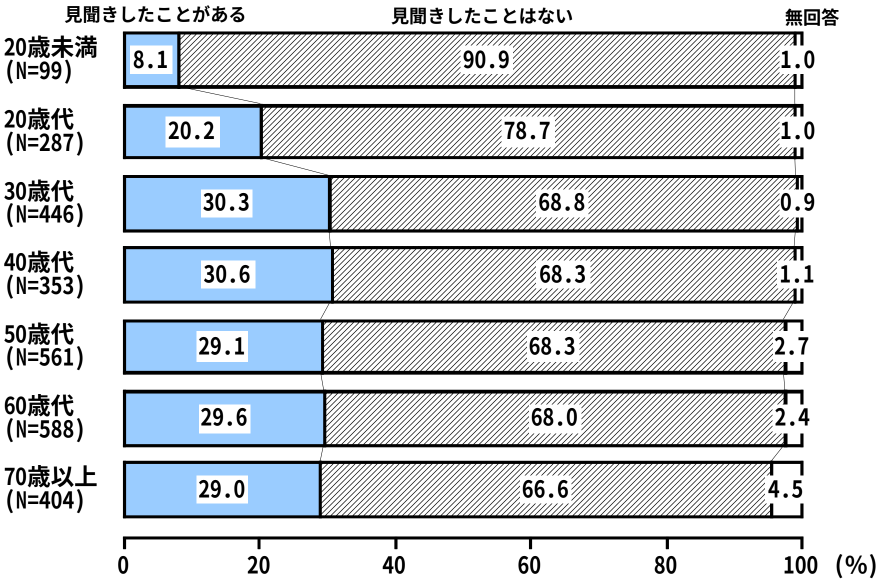
問９　あなたは、同和地区の人々に対する差別的な言動や落書きを見聞きしたことがありますか。

【問９　同和地区の人々への差別的な言動などを見聞きした経験】



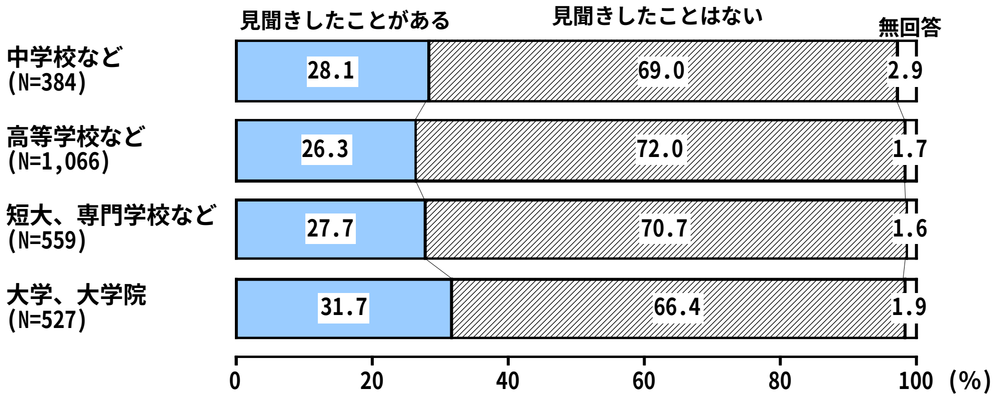
同和地区の人々への差別的な言動などを見聞きした経験については、「見聞きしたことはない」が 69.9%、「見聞きしたことがある」が 27.9%となっており、約３割が差別的な言動を見聞きしている。

【問９　同和地区の人々への差別的な言動などの見聞きした経験（年代別）】



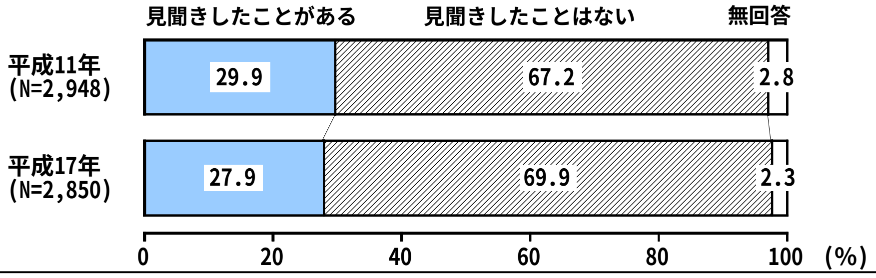
同和地区の人々への差別的な言動などを見聞きした経験について、年代別でみると、30 歳代以上では３割前後となっている。20 歳未満は１割に満たず、20 歳代も２割となっており、20 歳代と 30 歳代を境に年代間で差がみられる結果となっている。

【問９　同和地区の人々への差別的な言動などの見聞きした経験（最終学歴別）】



同和地区の人々への差別的な言動などを見聞きした経験について、最終学歴別でみると、「見聞きしたことがある」の割合は、すべての学歴で約３割となっている。実情として、同和地区の人々への差別的な言動は、現在でも残っていることがうかがえる。

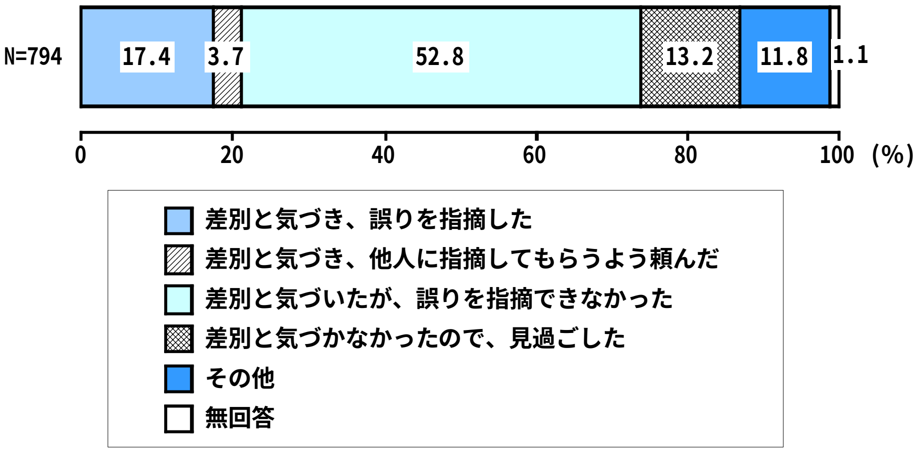
【問９　同和地区の人々への差別的な言動を見聞きした経験（前回調査との比較）】



同和地区の人々への差別的な言動を見聞きした経験について、前回調査と比較すると、「見聞きしたことがある」の回答は微減しているが、約３割の人は依然あると回答している。

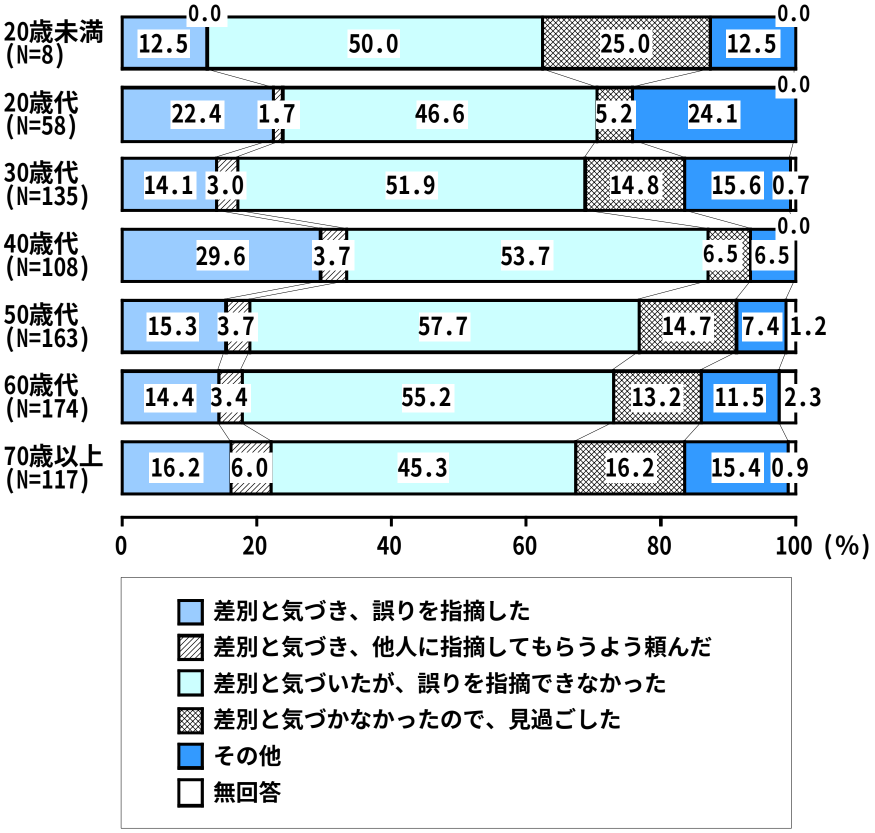
問９－１　「１．見聞きしたことがある」と答えた方にお聞きします。その時あなたは、どうされましたか。（あてはまるもの１つに○）

【問９－１　同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応】



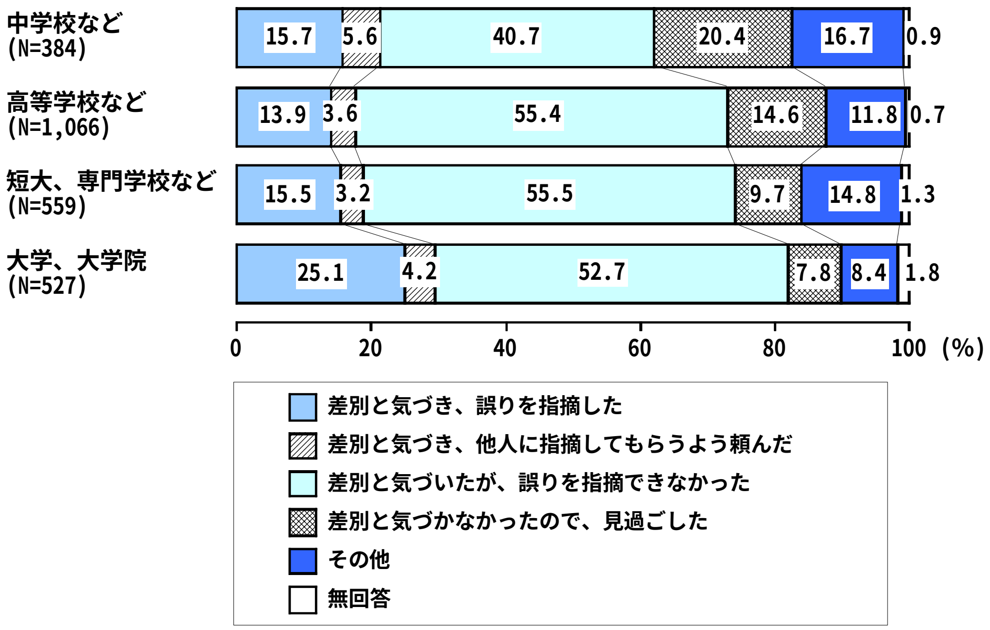
同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応については、「差別と気づいたが、誤りを指摘できなかった」（52.8%）が最も高く、次いで「差別と気づき、誤りを指摘した」（17.4%）となっている。差別と気づく人が大半を占めてはいるものの、誤りであるということを指摘することができる人の割合は多いとはいえない状況である。

【問９－１　同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応（年代別）】



同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応について、年代別でみると、「差別と気づき、誤りを指摘した」の割合は 40 歳代で 29.6%と最も高く、次いで 20 歳代で 22.4%となっている。「差別と気づいたが、誤りを指摘できなかった」の割合は 20 歳未満と 30 歳代～60 歳代で過半数を占め、50 歳代で 57.7%と最も高くなっている。

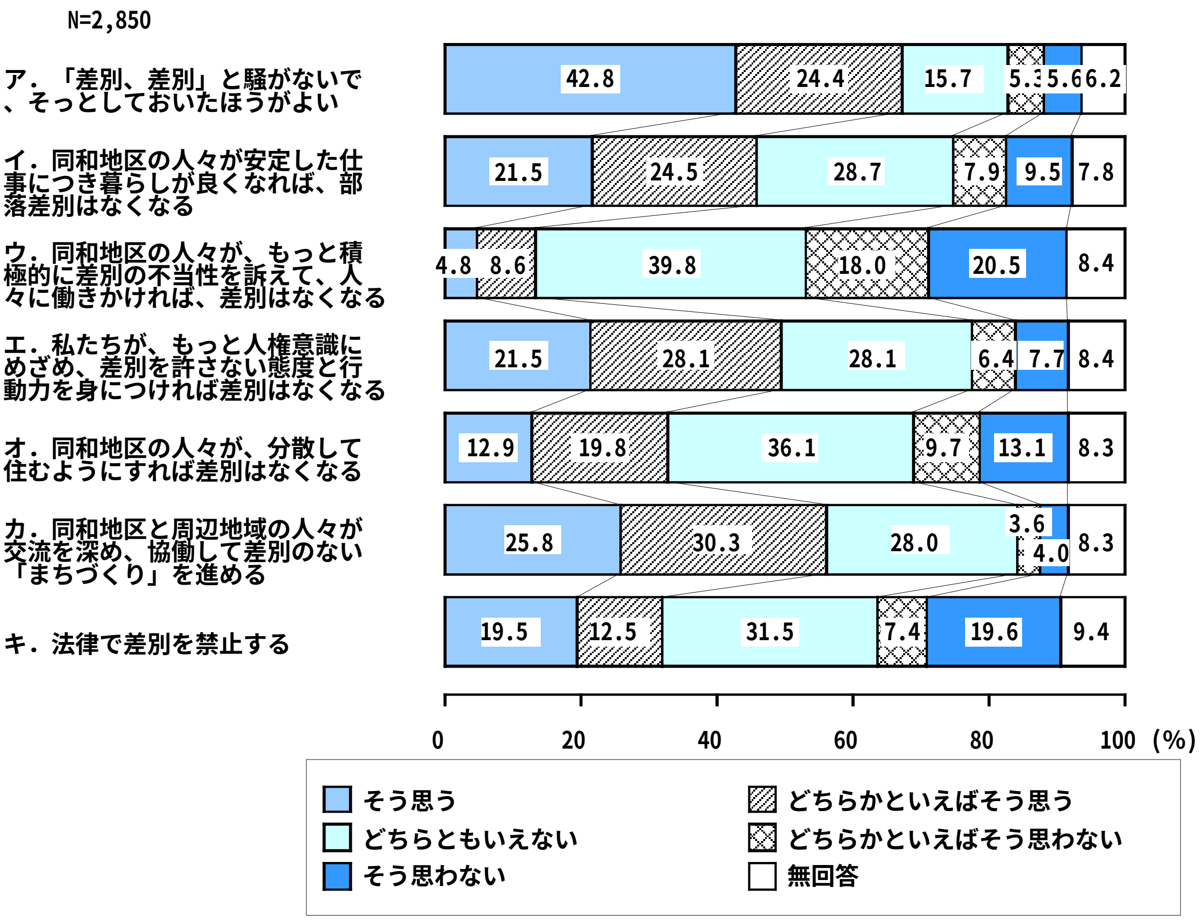
【問９－１　同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応（最終学歴別）】



同和地区の人々への差別を見聞きした時の対応について、最終学歴別でみると、中学校などでは「差別と気づかなかったので、見過ごした」、大学、大学院では「差別と気づき、誤りを指摘した」の割合が他に比べて高くなっている。

問 10　部落差別をなくす方法について、次のような意見があります。あなたはどう思いますか。
（ア～カのそれぞれについてあてはまるもの１つに○）

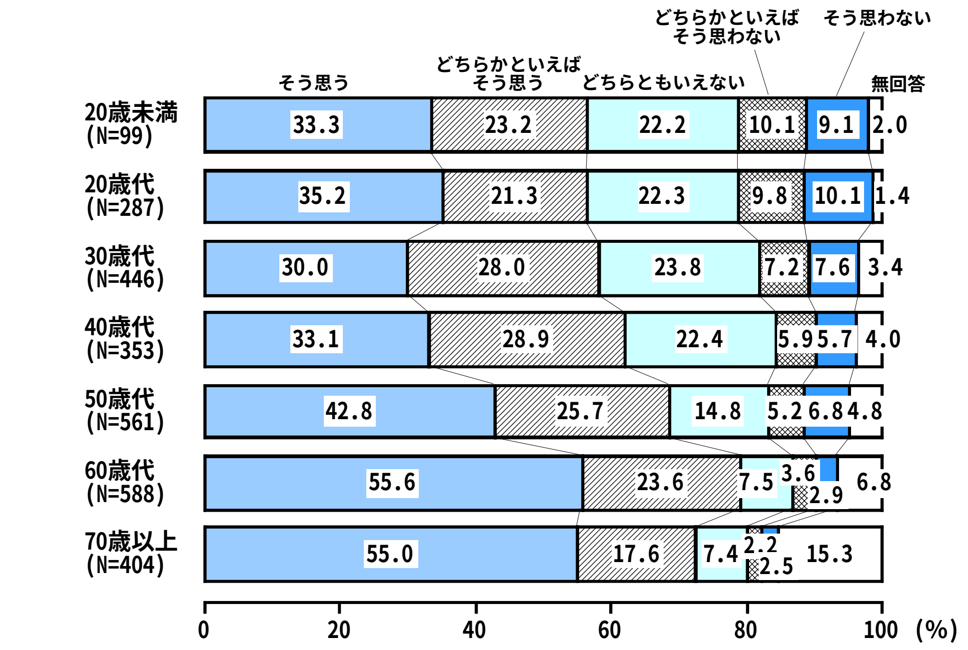
【問 10　部落差別をなくす方法】



部落差別をなくす方法については、「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」以外の項目では、「肯定派（「そう思う」と「どちらかといえばそう思う」を合わせた層）」の割合が「否定派（「そう思わない」と「どちらかといえばそう思わない」を合わせた層）」の割合よりも高くなっている。

「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」では、「否定派」の割合が高くなっており、「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」では「肯定派」の割合が高いことと照らし合わせると、差別についてあまり触れない方がいいという考え方が多数であると推測される。

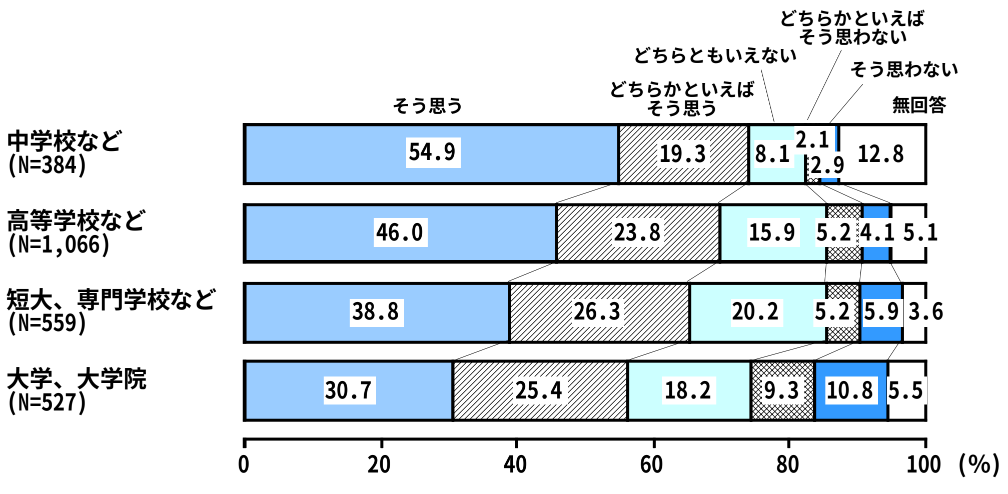
【問 10「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」（年代別）】



「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 60 歳代で 79.2%と最も高く、20 歳未満と 20 歳代で 56.5%と最も低くなっており、20 歳未満～60 歳代にかけては加齢とともに高くなっている。

年代を問わず、差別については、「寝た子は起こすな」的な意見が根強く残っていることを明らかになっている。しかし、これまでの歴史が示すように、この考え方は正しくないということを認識していくことから始めなければならないと思われる。

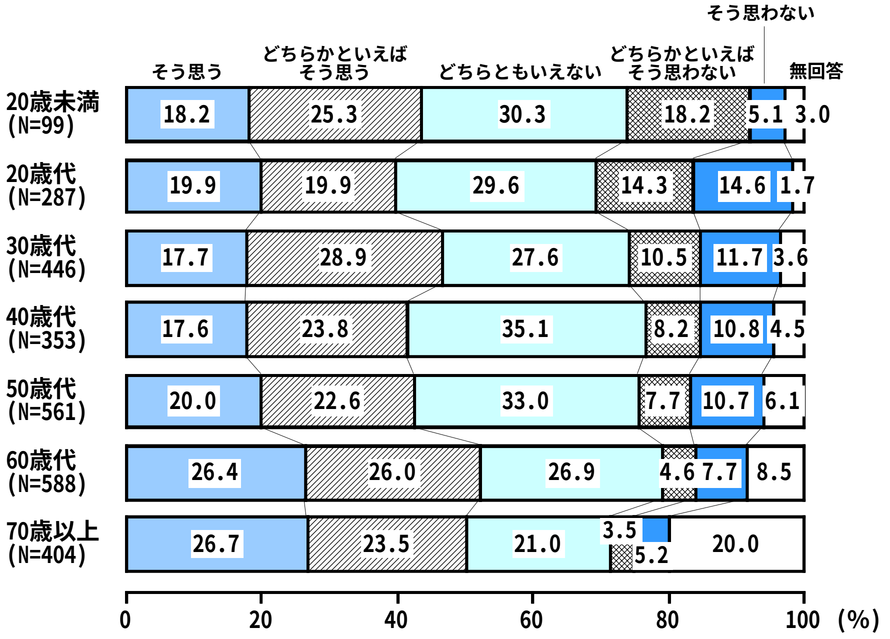
【問 10「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」（最終学歴別）】



「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は学歴が高くなるほど低くなっている。そのうち、「そう思う」

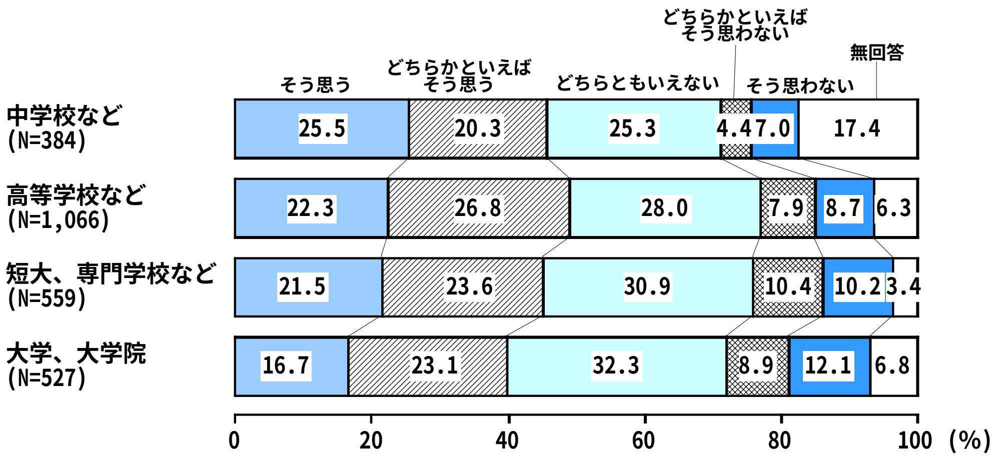
の割合は中学校などで 54.9%、大学、大学院で 30.7%と 20%以上の差がみられる。しかし、「肯定派」の割合は全ての学歴で過半数を超えており、今後も意識の改革が必要である。また、「そう思わない」の割合は学歴に関わらず１割前後と低くなっている。

【問 10「イ．同和地区の人々が安定した仕事につき暮らしが良くなれば、部落差別はなくなる」（年代別）】



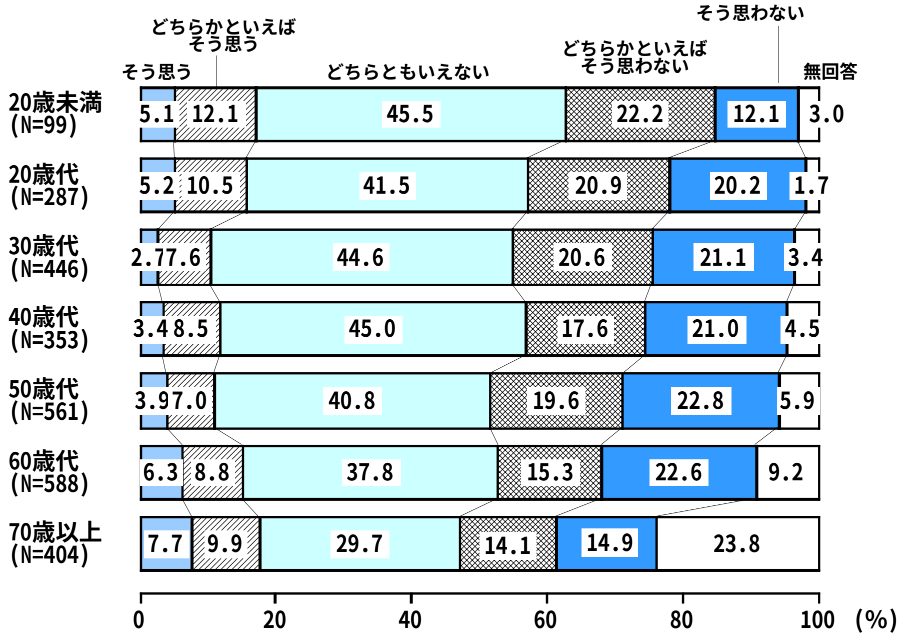
「イ．同和地区の人々が安定した仕事につき暮らしが良くなれば、部落差別はなくなる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 60 歳以上では過半数を超えており、その他の年代でも４割程度となっている。「否定派」の割合は 20 歳代で 28.9%と最も高く、70 歳以上で 8.7%と最も低くなっており、20 歳代以上にかけては加齢とともに低くなっている。

【問 10「イ．同和地区の人々が安定した仕事につき暮らしが良くなれば、部落差別はなくなる」（最終学歴別）】



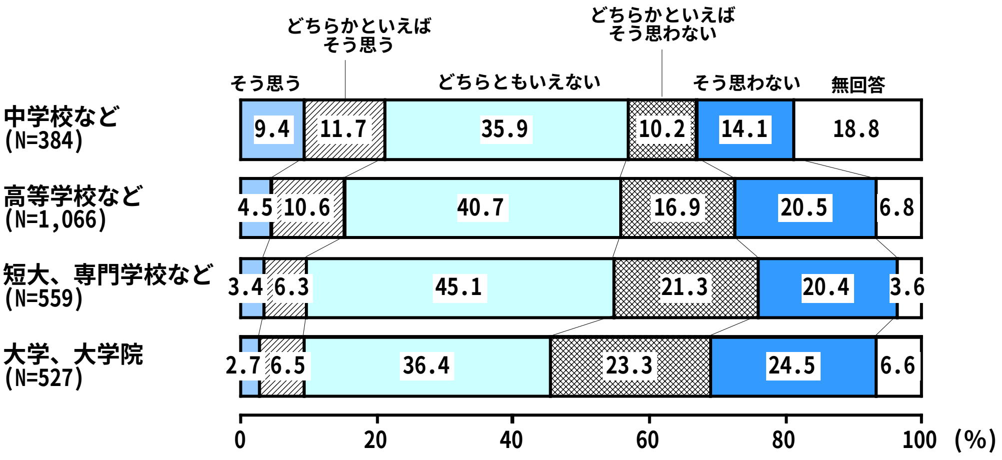
「イ．同和地区の人々が安定した仕事につき暮らしが良くなれば、部落差別はなくなる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は高学歴ほど低く、「否定派」の割合は高学歴ほど高い傾向にある。

【問 10「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」（年代別）】



「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」について、年代別でみると、70 歳以上以外では「否定派」が３割を超えている。「賛成派」はすべての年代で２割を下回っている。

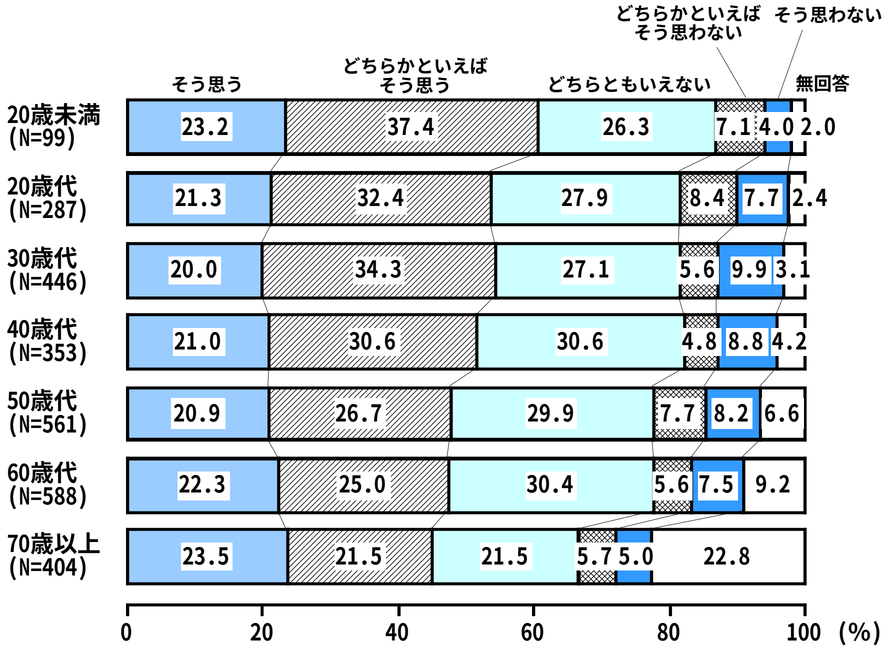
【問 10「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」（最終学歴別）】



「ウ．同和地区の人々が、もっと積極的に差別の不当性を訴えて、人々に働きかければ、差別はなくなる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は中学校などで 21.1%と最も高く、大学、大学院で 9.2%と最も低くなっており、高学歴になるほど低く、「否定派」の割合は高学歴ほど高くなっている。また、「どちらともいえない」の割合は学歴に関わらず、４割前後の高い割合となっている。

差別の不当性を訴えていくことが必要であるとの認識が極めて低いことがあらわれている。しかし、差別は黙認していてはなくならないことを広く周知する必要がある。

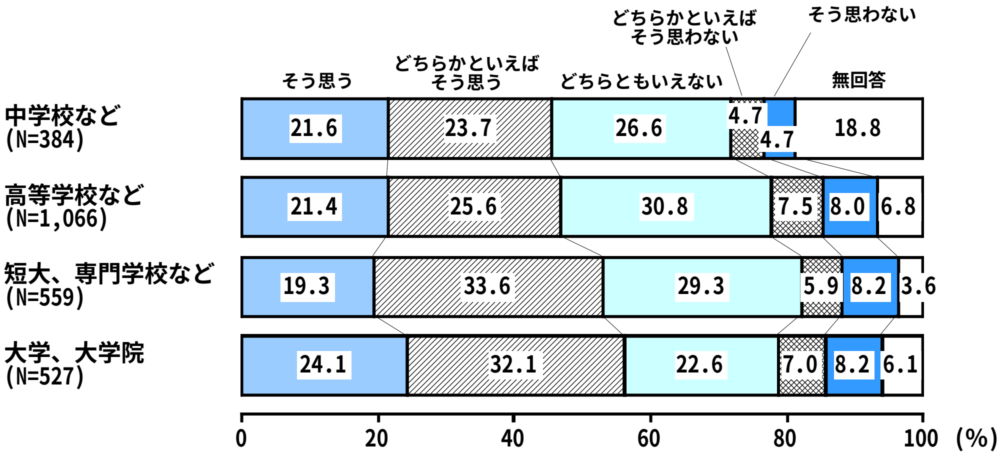
【問 10「エ．私たちが、もっと人権意識にめざめ、差別を許さない態度と行動力を身につければ差別はなくなる」（年代別）】



「エ．私たちが、もっと人権意識にめざめ、差別を許さない態度と行動力を身につければ差別はなくなる」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 20 歳未満で 60.6%と最も高く、70 歳以上で 45.0%と最も低くなっており、加齢とともに低くなる傾向がみられる。

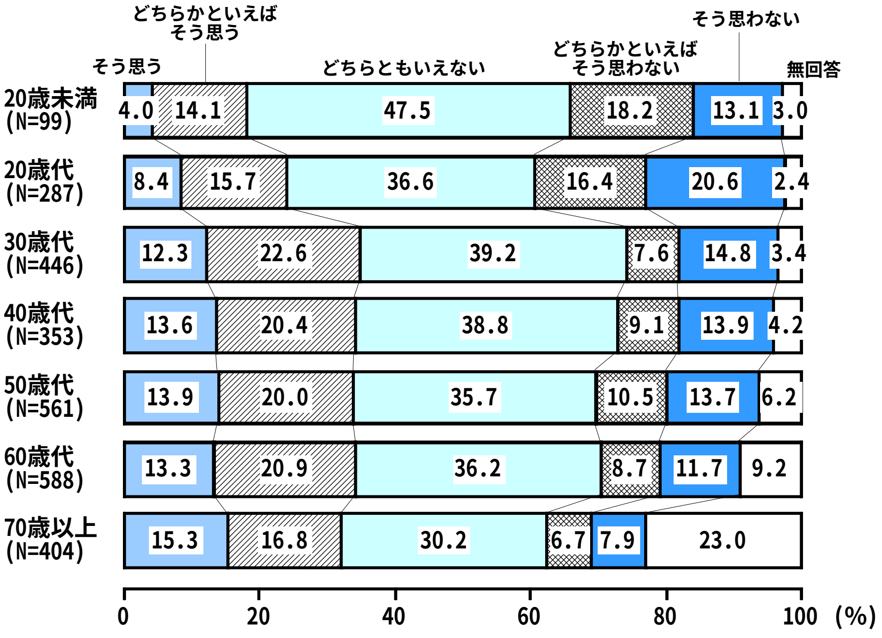
全ての年代において、部落差別をなくすためには、自分自身が人権意識の向上をはかり、差別を許さない態度と行動力を身に付けることが大切であるということは認識されているようである。しかし、知識や意識の向上だけでは差別はなくならず、そうした差別に対して行動を起こすことがさらに重要であることを広く周知することが大切である。

【問 10「エ．私たちが、もっと人権意識にめざめ、差別を許さない態度と行動力を身につければ差別はなくなる」（最終学歴別）】



「エ．私たちが、もっと人権意識にめざめ、差別を許さない態度と行動力を身につければ差別はなくなる」について、最終学歴別でみると、「肯定派」の割合は大学、大学院などで 56.2%と最も高く、中学校などで 45.3%と最も低くなっており、高学歴になるほど高くなっている。一方で、高等学校など以上では、「否定派」も 1 割以上存在している。

【問 10「オ．同和地区の人々が、分散して住むようにすれば差別はなくなる」（年代別）】

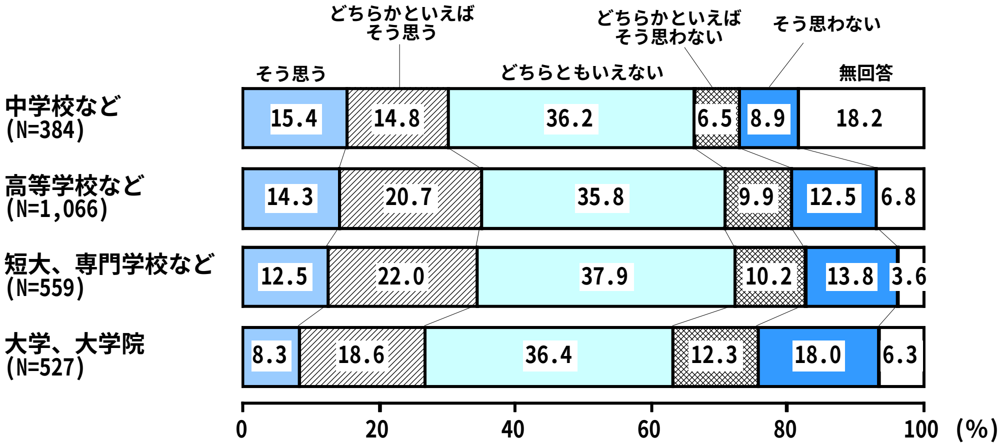


「オ．同和地区の人々が、分散して住むようにすれば差別はなくなる」という「部落分散論」について、年代別でみると、「肯定派」の割合は 30 歳代で 34.9%、20 歳未満で 18.1%と最も低くなっており、30 歳代を頂点に山型をなしている。また、20 歳未満と 20 歳代では、「否定

派」の割合が「肯定派」の割合よりも高くなっている。

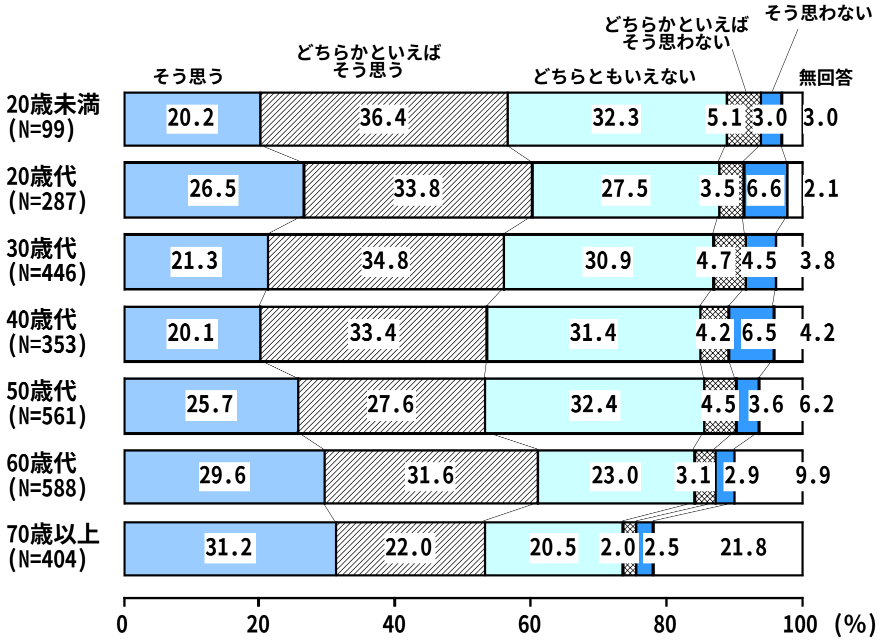
この考え方は、同和地区の人々が固まって住んでいるから差別が起こる、ばらばらになれば差別は起こらないという誤った認識からきている。この誤った認識を正すことが差別の解消につながると考えられる。

【問 10「オ．同和地区の人々が、分散して住むようにすれば差別はなくなる」
（最終学歴別）】



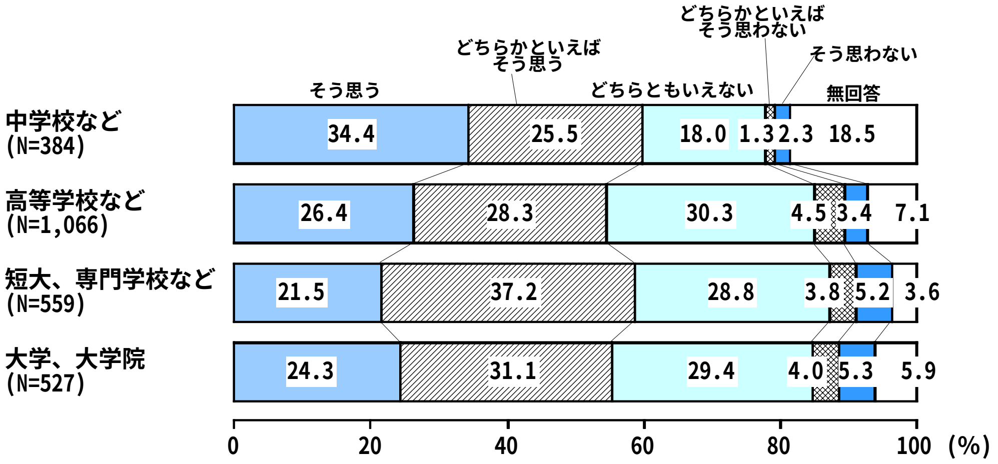
「オ．同和地区の人々が、分散して住むようにすれば差別はなくなる」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は大学、大学院などで 30.3％と最も高く、中学校などで 15.4％と最も低くなっており、高学歴になるほど高くなっている。一方で、「肯定派」の割合は大学、大学院を除いて３割を占めており、誤った認識が広がっている。また、「どちらともいえない」の割合は学歴に関わらず、３割以上の高い割合を占めている。

【問 10「カ．同和地区と周辺地域の人々が交流を深め、協働して差別のない「まちづくり」を進める」（年代別）】



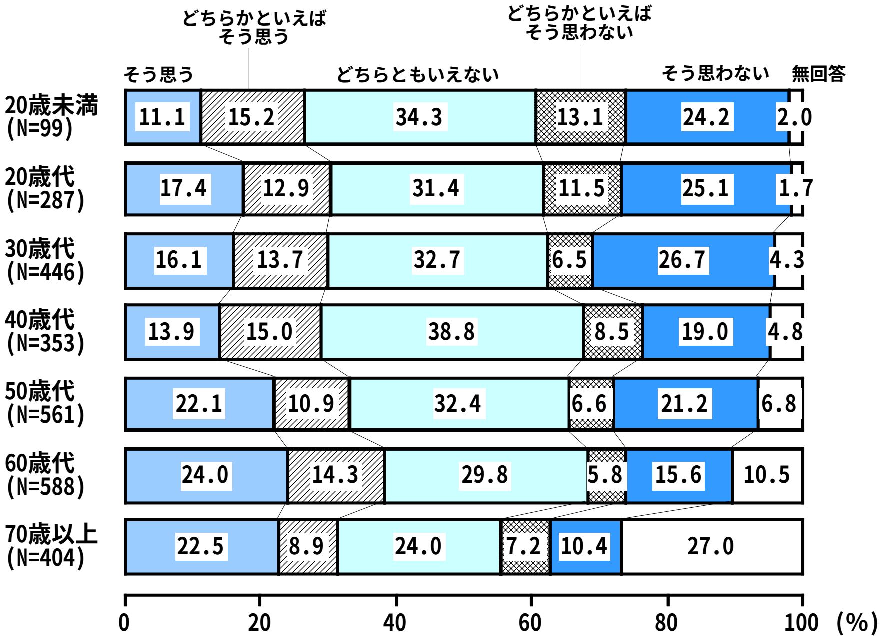
「カ．同和地区と周辺地域の人々が交流を深め、協働して差別のない「まちづくり」を進める」について、年代別にみると「肯定派」の割合がすべての年代で過半数以上の高い割合を占めている。「否定派」の割合は 20 歳代と 40 歳代を除いて 1 割以下となっている。

【問 10「カ．同和地区と周辺地域の人々が交流を深め、協働して差別のない「まちづくり」を進める」（最終学歴別）】



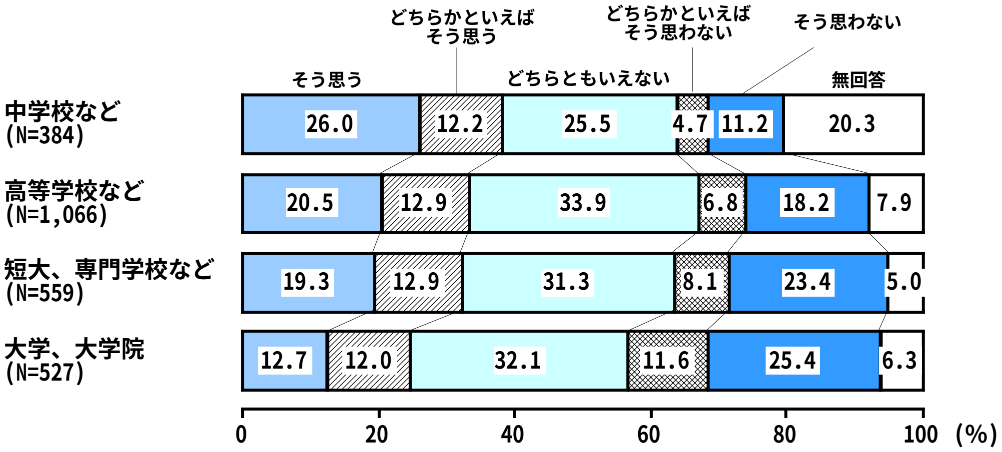
「カ．同和地区と周辺地域の人々が交流を深め、協働して差別のない「まちづくり」を進める」について、最終学歴別にみると「肯定派」の割合は中学校などで 59.9%と最も高くなっており、短大、専門学校などが 58.7%と続いている。

【問 10「キ．法律で差別を禁止する」（年代別）】



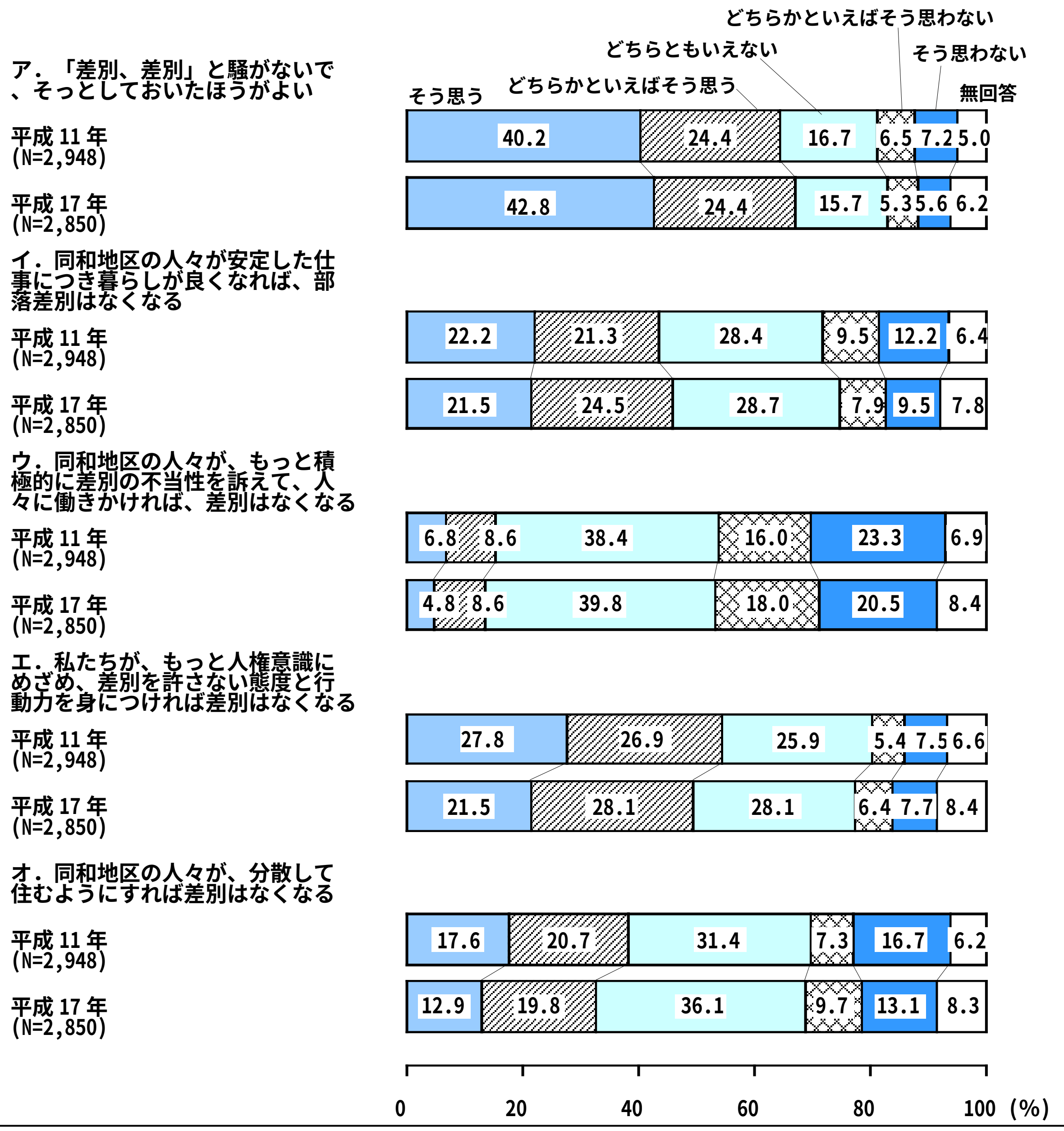
「キ．法律で差別を禁止する」について、年代別でみると、「否定派」の割合は 20 歳未満で 37.3%と最も高く、70 歳以上で 17.6%と最も低くなっており、加齢とともに低くなる傾向がみられる。

【問 10「キ．法律で差別を禁止する」（最終学歴別）】



「キ．法律で差別を禁止する」について、最終学歴別でみると、「否定派」の割合は大学、大学院で 37.0%と最も高く、中学校などで 15.9%と最も低くなっており、高学歴になるほど高くなっている。また、大学、大学院では「否定派」の割合が「肯定派」の割合を上回る結果となっており、法律を制定しただけでは、差別はなくならないと感じている。

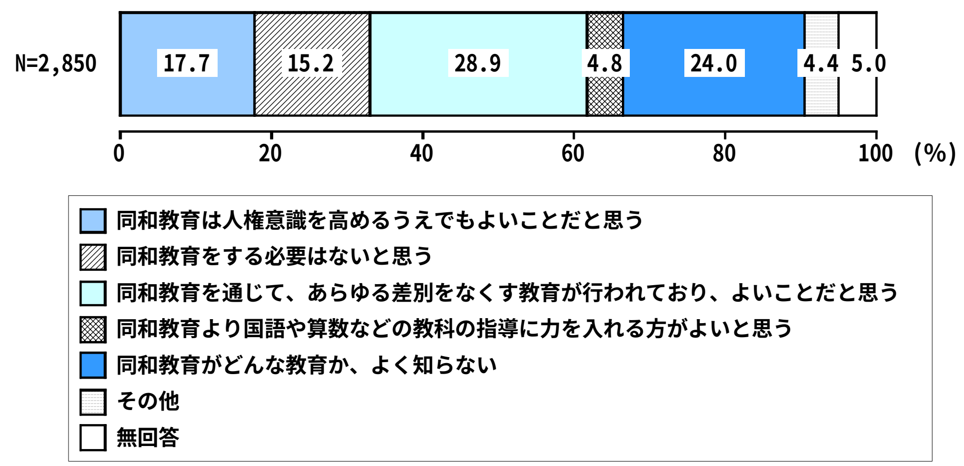
【問 10　部落差別をなくす方法（前回調査との比較）】



部落差別をなくす方法について、前回調査と比較すると、「ア．「差別、差別」と騒がないで、そっとしておいたほうがよい」、「イ．同和地区の人々が安定した仕事につき暮らしが良くなれば、部落差別はなくなる」の項目で「肯定派」の割合が微増し、その他の項目では減少している。

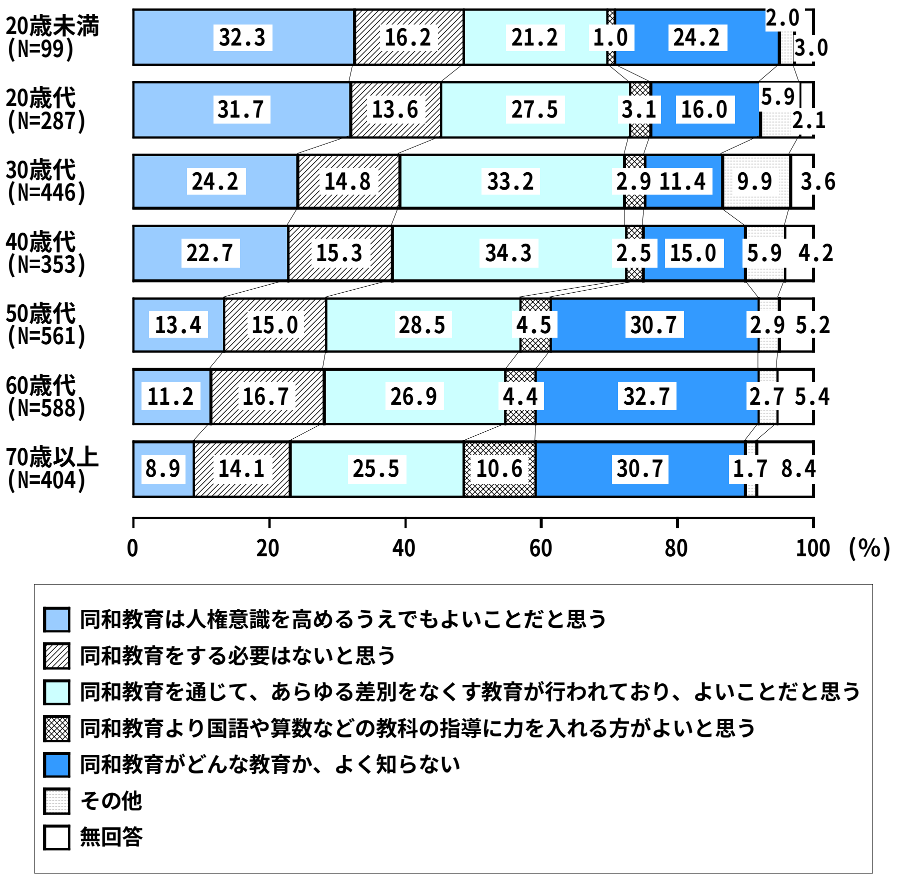
問 11　堺市では、学校で「同和教育」が行われていますが、あなたはどのようなお考えですか。
（あてはまるもの１つに○）

【問 11　学校での「同和教育」について】



学校での「同和教育」については、「同和教育を通じて、あらゆる差別をなくす教育が行われており、よいことだと思う」（28.9%）が最も高く、次いで「同和教育がどんな教育か、よく知らない」（24.0%）、「同和教育は人権意識を高めるうえでもよいことだと思う」（17.7%）となっている。「同和教育に関して否定的な意見（「同和教育をする必要はないと思う」と「同和教育より国語や算数などの教科の指導に力を入れる方がよいと思う」を合わせた層）」が２割となっている。

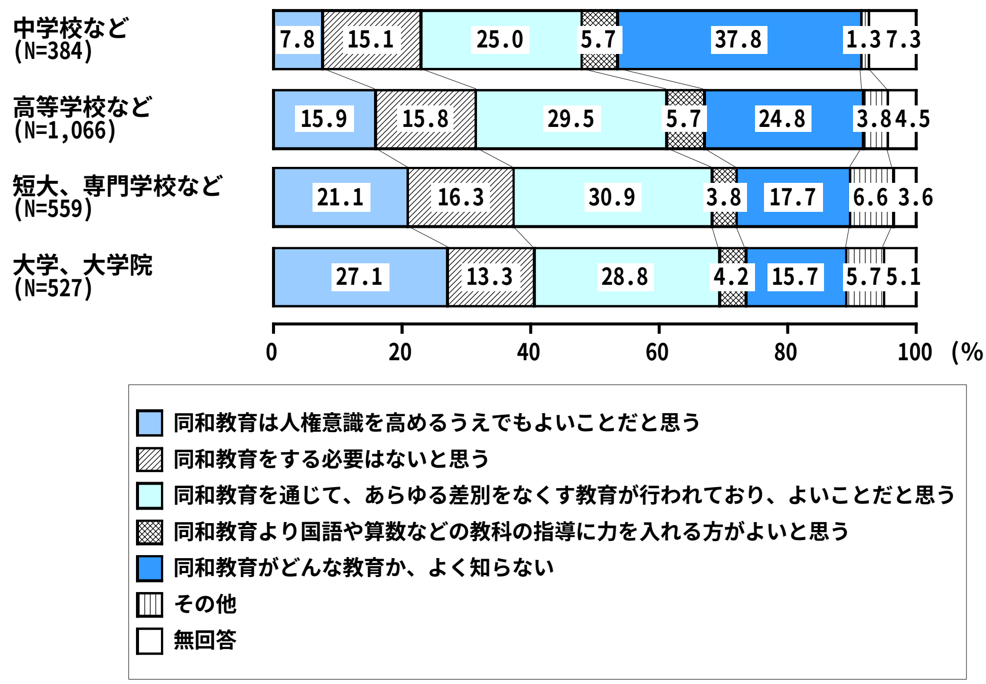
【問 11　学校での「同和教育」について（年代別）】



学校での「同和教育」について、年代別でみると、「同和教育は人権意識を高めるうえでもよいことだと思う」の割合は加齢とともに低くなっている。一方、「同和教育より国語や算数などの教科の指導に力を入れる方がよいと思う」の割合は加齢とともに高くなる傾向がみられる。「同和教育をする必要はないと思う」の割合は年代に関わらず大きな差はみられない。

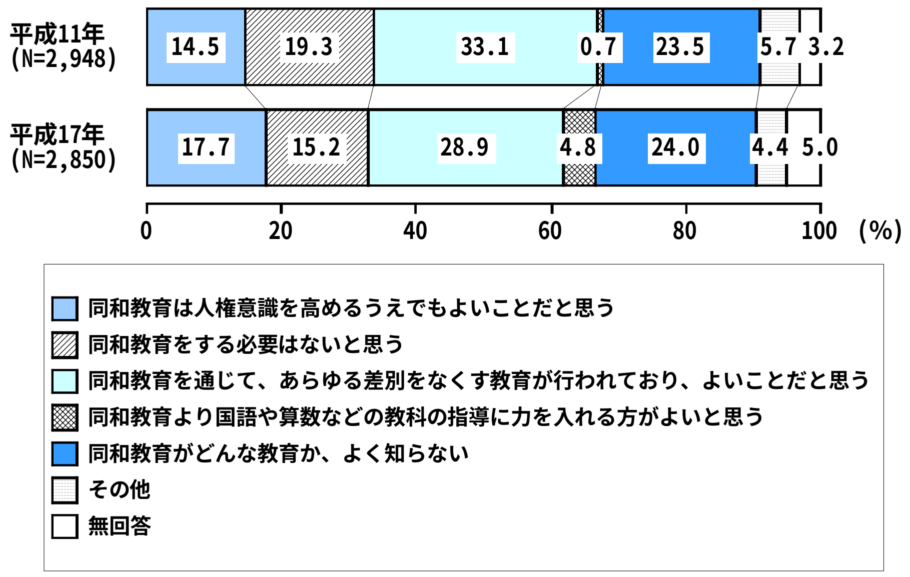
「同和教育を通じて、あらゆる差別をなくす教育が行われており、よいことだと思う」の割合は 40 歳代で 34.3%と最も高く、20 歳未満で 21.2%と最も低くなっており、40 歳代を頂点に山型をなしている。また、「同和教育がどんな教育か、よく知らない」の割合は 50 歳代以上で３割を超えている。

【問 11　学校での「同和教育」について（最終学歴別）】



学校での「同和教育」について、最終学歴別でみると、「同和教育は人権意識を高めるうえでもよいことだと思う」の割合は高学歴になるほど高く、逆に「同和教育がどんな教育か、よく知らない」の割合は高学歴になるほど低くなっている。「同和教育に関して否定的な意見」の割合は、学歴に関わらず2割前後となっており、大きな差はみられない。

【問 11　学校での「同和教育」について（前回調査との比較）】



学校での「同和教育」について、前回調査と比較すると、「同和教育に関して肯定的な意見」が前回同様に４割以上となっているが、一方で「同和教育に関して否定的な意見」も前回と同様に２割となっている。